

2.3 通信工学科

2.3.1 総説

通信工学科は、電気工学科と共に本学における最も古い歴史と伝統に輝く学科の一つであり、昭和31年4月、工学部電気工学科通信工学専攻として発足した。しかしながら、本学科の原流は、それよりさらに15年以上前、すなわち、東海電波科学専門学校の創立時にまでさかのぼる必要がある。

本学の創立者松前重義先生は、「無装荷ケーブル通信方式」の開発を終えた昭和17年頃、通信省の調査課長をしていた。当時、松前先生は、通信及び無線技術者の養成を目的として電気通信工学校の設定を計画していた。同校は、松前先生の先輩でもある小船井敬吉氏を校長に迎えて開校した。その後、第二次世界大戦の戦渦は拡がり、電波技術者の不足は著しいものとなった。既に通信省の工務局長になっていた松前先生は、その対策を持ち合せない文部省を相手とせず、朋友である篠原登先生らと協力し、私学としての電波技術者練成所を設立した。そして、昭和19年3月8日、電波科学専門学校を設立した。やがて終戦、社会の混乱の中で敗戦国日本の復興をめざして、それ以前に設立していた航空科学専門学校及び電気通信工学校と電波科学専門学校とを併合させた。その後、東海学園の母体となった東海科学専門学校を創立。更にそれと並行して旧制東海大学を設立、予科を清水市の駒越に設置した。そして三年後、旧制東海大学の学部が発足した。その二年後、学制改革により、新制東海大学へと移行した。その際、それまであった専門学校は東海大学に吸収された。校舎も清水から東京の代々木に移転、代々木1号館の落成とも相まって、戦後の荒廃から本学を再建する第一歩が踏みだされた。時に昭和30年である。このように、通信工学科の母体は、学園創立から電気工学科として存在していたのであるが、代々木への移転が完了したその翌年、すなわち、昭和31年の4月に、電気工学科電力工学専攻とならんで通信工学専攻として発足することとなった。この時が名実ともに本学科の歴史がはしまる時となった。

当時の日本における電気通信工学は、電信電話の時代から真空管を経て、やがてトランジスタの時代へはいろいろと進んでいた。そして国内では、テレビの全国中継が実現し、戦後経済の回復にともなってテレビが急激に普及、各地に民間放送が開局されつつあった。一方、国外では、人工衛星による宇宙通信の可能性が開かれようとしていた。こうした技術革新が進行している時に、本学科は第一期生27名を迎え、平島正喜主任教授のもとに発足したのだった。

昭和32年4月には、第二期生として約130名の学生が通信工学専攻に入学したが、このうち約50名は、そののち開設された電子工学専攻へ移り、電子工学科の第一期生となった。翌33年には、本学創立15周年を迎え、新装なった代々木2号館、通称X字型校舎の屋上に設置されたアンテナから、FM東海の試験電波が、NHKのFMに遅れること一年で発射された。

昭和34年には、専門学校及び旧制大学時代に教鞭をとっていた平岡寛二教授が本学に戻り、通信及び電子工学専攻の主任教授に就任した。そして翌35年3月20日、通信工学専攻の第一期生27名が希望に燃えて社会に巣立っていった。

電子・電気通信工学関係の技術革新はその後止まるところを知らず、とりわけトランジスタ技術の進歩にはめざましいものがあった。その頃から、トランジスタ・ラジオ、トランジスタTVは、どこの家庭にも普及していった。一方、FM東海の電波を通して、本学の名声も次第に高まり、応

募してくる学生も年ごとに増えて来た。こうした技術革新と学生の増加に対応して、本学科の教育内容、実験設備、そして教員組織も着々と整備されていった。

昭和36年、かつて松前重義先生の部下でもあった谷村 功教授が通信工学専攻の主任教授に就任した。大学の校舎や設備などは急ピッチに整備され、翌37年には相模原校舎が完成した。しかし、そこは、わずか1年間使用しただけで相模高校となり、翌昭和38年に完成した湘南校舎へとキャンパスは移った。さらにこの年には、大学院工学研究科電気工学専攻及び第二工学部通信工学専攻が発足、谷村教授が工学部長ならびに第二工学部長を兼務することになった。

昭和41年、創立十周年を迎えた電気工学科通信工学専攻は、工学部通信工学科として認可され、電気工学科から独立した。これに伴いカリキュラムの改正、教授陣の増強がはかられ、学生の急激な増加に対応した。さらに、この年福岡校舎が、翌41年に札幌校舎が開校し、本学科も両校舎に教養課程を開設した。

昭和44年になり、松前総長のかつての腹心、米山正雄教授が本学科の主任教授に就任した。この当時、本学の急成長ぶりは大学の内外から驚きの目で見られていたが、大学内部では、通信工学科をはじめ、電気関係の各学科は、研究室ならびに研究用設備の不足に悩んでいた。析しも、湘南校舎は校舎やグラウンドの整備が着々と進み、さながら建築ブームの観を呈していた。こうした現状にかんがみ、米山教授は電気系四学科（当時）の力を結集し、建築中の9号館をこれら学科の研究、実験の本拠地とすべく日夜奔走され、これが実って現在まで続いている。これをきっかけに、電気系教室会議が設立され、初代議長に米山教授が就任した。これ以後、電気系学科の共通の問題はこの機関で審議され決定されるようになった。特に、福岡、札幌両校舎の充実のために、現地の教養部長から強く要請されていた若手教員の派遣の問題については、電気系で再三再四にわたって検討が加えられ、森田定市工学部長の裁断を経て、まず第一陣として松尾講師（当時）が2年間の予定で福岡に赴任した。そして、2年後の47年には白石講師が、49年には三木講師がそれぞれ出向帰任をくり返し、同校舎の整備が順調に行なわれた。一方、札幌校舎においては、現地で任用された浅利講師が一貫して教育、研究の任にあたり、福岡校舎と同様、年ごとに充実されていった。

米山教授の主任就任は、こうした教育行政面のみの改革にとどまらず、さらに研究活動の活発化を促がした。大学院の整備はもとより、電気系学科のカベを取り除いた専門研究グループが結成され、それによって各教員の研究活動が触発されるようになり、今日ではそれが実った。このことは、本学科の教員の研究業績、すなわち、国内、国外で発表した論文、専門学会誌や紀要等に掲載された論文、あるいは著書などが如実に物語っている。また、国際的な学术交流も始り、昭和52年7月には、ブダペスト工科大学の二人の教授を迎え、霞ヶ関ビルでシンポジウムが開かれた。その際、本学科からも数編の論文が発表された。

一方、技術革新はさらに進み、それによって集積回路技術の向上、コンピュータの普及は、本学科における教育内容にも大きな変化を呼び起した。本学科では、昭和49年度の新入生から、まったく新しいカリキュラムを適用することに踏みきった。すなわち、三年次より、従来のクラス編成をそのままにし、これとは別に情報通信、情報物性、コンピュータ・サイエンスの三つのコースを設け、学生をその志望と適正能力に照らして各々のコースにふり分け、それぞれの分野がより深く学習できるようにした。それと同時に、低学年次に通信工学の基礎講座を有機的に配置し、基礎学力の向上にも配慮が加えられた。また、昭和53年度より、専門の基礎科目の演習のクラスを学習能力

別に分けて教育することによって、教育効果の向上が計られた。これは、森田工学部長の提唱による教育構造改革案にそって実施されたものである。今日、大学の内外で多くの卒業生が活躍している状況を見ると、この教育改革の効果が如何に大きかったか、改めて当時の先生方の見識の深さに感服する次第である。

本学科の研究体制は、一部の研究室を残して、大部分が代々木校舎から湘南校舎への移転を完了した。教育面での充実とともに、研究体制も米山主任教授の下で整備が進み、先生方の研究成果もこの頃から続々と発表されるようになった。これには、毎週、土曜、日曜日も休まず若い先生方や大学院生を対象にした主として数学のゼミを永年に亘って継続された篠崎寿夫先生の献身的な指導の結果であった。これが、がやがて次の時代に結実するのである。

昭和52年には通信工学科の同窓会組織として「東海大学通信工学会」が結成され、名誉会長に松前重義総長、初代会長に松尾守之氏が就任した。ここに、通威信工学科の全卒業生（当時4,200人余）が組織化され、その後の本学科の学生指導に大きな貢献をすることになった。

昭和53年の3月末日には、工学部35周年史が編纂された。通信工学科の歴史も、松尾助教授によって纏められた。

昭和54(1979)年3月には、第四代主任の米山教授が主任を終えられ、同年4月より池田辰雄教授が第五代の主任に就任した。池田主任教授の下では、米山前主任のもとで構築された教育研究体制の中で、若い先生方を中心として教育研究活動が活発に行われた。このような指導体制の下で、若手教員の研究にける熱意と努力の結果、まず、東海大学の学位の第一号として昭和44年に町田講師が学位を取得した。その後、54年に白石助教授、56年に鈴木健文助教授、58年に松浦講師、60年に小島助教授、61年に松尾助教授と若林助教授、63年に富山助教授、平成2年には吉田助教授、平成4年に熱田講師、平成5年に森屋助教授が、相次いで工学博士の学位を取得した。この輝かしい歴史は、米山先生の指導で構築された研究体制の中、今は亡き篠崎寿夫先生の指導の賜物であり、本学科はもとより、東海大学の歴史の中に特筆される成果でもある。

一方、このこの頃から本学科教員の国際活動も活発化してきた。昭和47(1979)年には寺本教授がタイ王国モンクット工科大学へ訪問教授として出向、昭和52年にはハンガリーのブダペスト工科大学と通信工学科の交換シンポジウムを開催、昭和55年には白石助教授が米国ボストンのMITに訪問研究員として、昭和63年には松浦助教授が英国エセックス大学に訪問研究員として、平成元年には松尾教授がブダペスト工科大学に客員教授として、平成3年には若林教授が米国のUCLAに訪問研究員として、平成4年には近藤教授がフランス国立情報制御研究所へ訪問研究員として、平成6年には吉田助教授が米国のUCLAに訪問研究員として、平成7年には小塚教授が米国ボストンのハーバード大学に客員教授として、平成8年には熱田助教授が米国イリノイ大学に、訪問研究員として滞在した。

長期にわたって本学が援助してきたタイ王国モンクット工科大学ラカバン校に対する支援のため、国際協力事業団(JICA)の要請で、平成8年には若林教授が個別専門家として、平成10年には森屋教授が長期専門家として、続いて平成11年には松尾教授が同じく長期専門家としてバンコクへ赴任した。

こうした間にも、世界各国で開かれる国際会議で論文を発表する教員は毎年後を絶たず、その一方で海外からの留学生、訪問研究員も多数におよび、本学科の国際活動は他の学科を圧倒する勢い

で活発に行われた。

平成になり、本学科の教育内容も時代の要請にしたがって改革を断行した。

昭和63年の札幌教養部の廃止、平成2年の福岡教養部の廃止はそのきっかけになった。これにより、本学科のカリキュラムを考える場合に、常に両校舎の事情を常に考慮しなければならないという束縛から開放され、湘南校舎のことだけを考えてカリキュラムを編成することができるようになった。平成2年のカリキュラム改定では、本学科を卒業し、一部、2部上場企業で部課長以上の役職についている卒業生によるOB講座を「電子情報通信技術文明論」として開講した。企業の第一線で働く本学科の卒業生の講義は、専任の教員の講義とは違った魅力があり、母校の教壇に立つ卒業生の熱意が、受講しても単位の認定を受けられないと分っている他学科の学生も潜り込むなど、現在でも最も人気の高い授業である。

平成3(1991)年8月、折りしもソビエト共産党が崩壊したニュースを伝える同じ紙面に、松前総長の逝去が報じられた。本学科の教職員は、いよいよこれからは自らの判断でこの歴史と伝統ある学科を発展させていかなければならないという覚悟をもって創立者の訃報を聞いたのだった。

それから2年後の平成4年、代々木校舎以来、若い先生達を育ててきた、「電子計算機の佐藤」と言われてきた佐藤達男先生が定年退職された。つづく翌年は、矢野、篠崎、角田、東野の各先生が、そしてさらにその翌年、寺本先生がそれぞれ定年で退職された。それらの先生の跡を埋めるべく、平成6年には5人、翌7年には2人の先生、合計7人の先生が新任として着任された。その内一人を除いて本学以外の大学の出身者であった。そのため、学科の雰囲気も一変した。

それに呼応するかのように、平成5年4月から大学全体の教育改革の第一段として、卒研を除く全ての科目が半年間で完結するように、カリキュラムの大改定が行われた。さらに、教育改革の第二段として、完全 Semester 制へと移行し、本学科最後のカリキュラムが完成した。それは、学年制を廃止し、留年制度そのものの廃止につながる大改革であった。それに伴って、永らく親しんできた学生証番号のシステムも変り、多少の戸惑いも感じられた。かくして、平成13年3月31日をもって、2,3,4年次の学生を残して、昭和31年以来45年間続いてきた工学部通信工学科は、その幕を閉じ、新たに電子情報学部コミュニケーション学科として生まれ変わるようになったのである。

2.3.2 教育内容

本節では、通信工学科における教育内容の変遷について述べる。周知のように、第二次世界大戦後の科学技術の変化はめまぐるしく、特に、電子通信工学の分野における技術革新は、大学における研究のあり方、および、教育内容に大きな変化をもたらした。本学科の教育内容も、こうした状況に対応して、いくつかの変遷を経て今日に至っている。すなわち、昭和31(1956)年の発足当初より最後のカリキュラムが実施された平成9(1997)年までの41年間に8回に及ぶ改定が行われた。学生数の増加、キャンパスの拡充、大学院の設置、さらに教員自らの研鑽と努力によって、教育内容は時代の変化とともに充実したものへと発展していった。

第1期(昭和31(1956) - 昭和35(1960)年)

この時期は本学科にとっては、草創期である。この頃から普及が目覚しくなった。テレビ放送や、マイクロウェーブによる市外電話の中継などの技術革新に合わせ、これらを習得するための講座が

多く取り入れられた。これは、新設大学の特色を生かした斬新なものであった。

第2期（昭和36(1961) - 昭和38(1963)年）

この時期は、トランジスタなど半導体技術やその基礎である電子工学が著しく発展した時代である。カリキュラムも真空、固体、気体の各電子工学、および、電気材料に重点が置かれた。また、マイクロ波工学、パルス工学、情報理論、電子計算機などの講座が新たに開講された。

第3期（昭和39(1964) - 昭和46(1971)年）

この時期は、研究、教育の中心が代々木校舎から湘南校舎に移行するときでもあり、また、学生数が急激に増加したいわゆる急増期でもあった。通信工学専攻は、通信工学科として電気工学科から完全に分離独立した。したがってカリキュラムも強電関係の科目が全て姿を消し、通信工学科としての特徴がはっきりしたものに変わった。

第4期（昭和47(1972) - 昭和48(1973)年）

この時期は大学の大衆化が叫ばれるようになった時期である。本学科の学生数は、この頃より卒業の時点で300名定員という数の上での定着もあり、思い切ったカリキュラムの整理が行われた。その結果、卒業に必要な単位数も、昭和45年度には153単位であったものが、この時期には14単位少ない139単位に減少した。

第5期（昭和49(1974) - 平成元(1990)年）

半導体技術の向上による集積回路の発達、デジタル型電子計算機の普及、人工衛星による宇宙通信をはじめ、データ通信、コンピュータ・ネットワークなどの新技術の実用化など、情報化の波は本学科の教育面での改革の必要性を喚起した。しかし、一方では大学の大衆化が進む中で、修得単位数の増加は避けられないというジレンマがあった。そこで考え出されたのが、コース制の導入であった。すなわち、全ての学生は、3年次に上がる前にその希望および適正を考慮して、情報通信コース(Aコース)、情報物性コース(Bコース)、コンピュータサイエンス・コース(Cコース)のいずれかのコースに分けられることとなった。そして、専門の選択科目は、各コース毎に開講されている科目をその自分の属するコースの中から選択して履修する仕組みが導入された。一方、専門領域では、基礎教育の重要性を考慮しながらカリキュラムの編成を行った。コース制をとった新カリキュラムでは、専門の基礎科目を一年次の前期からとり入れ、入門講座として前後期合せて4科目を必修科目として導入した。この頃、本学の計算機センターには、FACOM-45Sという、当時としては大型計算機に準じる機種が導入された。続いて、その後継機として本格的な大型コンピュータUNIVAC 1108が稼動するようになった。それに呼応してコンピュータのプログラミング教育も実習をともなう形で実施されるようになった。一年次には「プログラミング入門」という科目が設けられ、プログラムやデータはマークカードを用いて入力するという実習方式で情報処理の基礎教育が行われた。この結果、本学科は、まさに、情報通信工学科ともいえる教育態勢を整えることができた。

情報交通、通信手段の発達にともない、国際社会での日本の役割は大きくなる一方である。また、技術者が海外に派遣されることも、あるいは我々が外国から訪れる技術者と接触する機会も以前とは比較できないほど増加している。こうした国際社会で活躍することのできる技術者を養成することは本学科の急務であった。そこで、2年次では「電気英語」を、3年次では「ゼミナルA」を必修として、その中で専門の洋書が読めるような基礎的な訓練を課することにしてある。しかも、これ

ら科目は、学力(英語の点数)に応じてクラス分けを行ない、すなわち学力に重点をおいた能力別の教育を行ない、優れた学生はさらにその能力を伸ばし、普通の学生には基礎を重点的にたたき込む、という、より効果的な教育方法が採用された。

所で、このカリキュラムでは、従来からあった卒業研究はカリキュラム表からその名前が消えた。しかしながら、工学部における研究活動は、文献を読み、実験を行ない、ゼミで検討を加えるというパターンに従うのが普通である。したがって、本学科でも4年次に、「文献研究」、「ゼミナールB」、「通信工学実験B」という科目を設けて、この3科目を各先生方の研究室で、グループを構成して総合的に学び、研究することによって卒業研究という科目に相当、あるいは、それ以上の上の教育効果が上げられるようにした。

第6期(平成2年(1990)年 - 平成4(1992)年)

この頃から大学をとりまく社会的環境は、いまや見過ごすことのできないほど大きく変化しはじめた。大学審議会が、文部省の諮問にこたえて大学改革に関する報告書を提出し、各大学の自主努力によって改革の推進をはかるべきことを進言したのは昭和が終わる63年のことであった。本学においても、この報告の骨子となっている「大学および大学院の設置基準の改訂」をガイドラインとしたカリキュラムの改訂が各学部、各学科に指示され、そのための作業を急ピッチで進めた。

いつの時代でも、社会の変化をリードしてきたのは科学や技術の発展である。現代の工業社会から情報化社会への移行は、コンピュータや電気通信といった先端技術の急速な発展によるものである。社会の情報化が大学に改革を迫っていると言うことができる。

社会の情報化は情報の洪水をもたらしている。情報には処理される情報と伝達される情報とがあり、情報処理はコンピュータ技術、情報伝達は通信工学の分野である。処理される情報も伝達される情報もその本質は同じであるが、歴史的には別々の学問分野を形成してきた。

現代の通信工学および情報技術の発展は、両方の技術を有機的に結合し、情報通信という新しい分野を切り開いた。それだけではなく、すでにコンピュータと電気通信を一体化した情報通信システムが実用化され、人々は意識する、しないに関わらず、それなしでは生活がなり立たないように社会システムの中に組み込まれている。

本学の創立者松前重義先生は電気通信の分野で革新的な技術開発をされ、その後の通信技術に大きな影響を残された。その流れを汲む工学部通信工学科では、技術の変化に合わせてほぼ5、6年ごとにカリキュラムの改訂を繰り返してきた。その基本姿勢は、学生に最先端の技術を教育するとともに、技術革新の早いこの分野に対し、社会に出た後も将来にわたって対応できるようにしておくことである。そのために、改訂の度に基礎科目の比重が増やされてきた。それとともに、先端技術については系統別に整理した上で、その学問を支えている基本概念を理解できるように学科目の配置を考慮してきた。

数回にわたるカリキュラム改訂の経過を振り返ってみると、技術の変化によっても全く変ることのない科目と、先端技術を理解するために必要となる新しい基礎科目とがあることに気付く。通信工学科では、こうした点を見落とすことなく、また、技術の進歩の表面的な華やかさに惑わされることなく、限られた四年間の中で、学生の将来と通信技術の発展を考慮しながらカリキュラムの改訂を行ってきた。

大学改革の叫び声が大きくなる前から、技術の著しい変化を察知した本学科ではカリキュラムの

改訂作業に入り、平成2年度生から新カリキュラムによる教育をはじめた。新カリキュラムを適用された最初の学生が3年次に進級した時点で、これに基づく専門科目が一斉に開講された。

このカリキュラムでは、これまで永らく続けてきた3コース制から、「電子・情報通信コース」と「コンピュータ・人工知能コース」の二つに集約した。これに伴い、これまで、「ゼミB」、「文献研究」、「実験B」をセットにした卒業研究の教育指導体制を「卒業研究」と改めた。そして、ほとんどの科目が半期で完結するように考慮された。

こうしたカリキュラムの中でその最も顕著なものが、2年次後期に開講した「電子情報通信技術文明論」である。この科目は2単位の専門選択科目であり、土曜日の4時限に開講したにもかかわらず、大変な人気を博している。

「文明論」と銘打ったことにより、すでに本学の特徴となっている「現代文明論」との関連を想像される方も多いと思われる。確かに、この講座を担当する講師とテーマは「現代文明論」と同じように毎週交替するのであるが、「現代文明論」と最も異なる点は、講師陣を、現在、情報通信産業界の技術者として第一線で活躍している卒業生、それも通信工学科を卒業したOBに限定しているところである。具体的な講師陣については、「卒業生と同窓会活動」の項を参照されたい。

第7期（平成5(1993)年 平成8(1996)年）

文部省から「大学および大学院の設置基準の改訂」が正式に発動されたのを機に、本学は卒業研究を除いて全ての科目を半期で完結するようにした。そして卒業に必要な単位も124単位と決められた。本学科では、既にこの3年も前から文部省の意向にそってカリキュラムの改訂を実施していたので、今回の半期制移行に対しては、それほど大きな改定を必要としなかった。しかし、そのカリキュラムは、「基礎科目（基幹科目の基礎）」、「基幹科目（各専門分野に進むに当たっての主要な科目）」、「リテラシー科目（読み書きそろばん的な科目）」、「その他」に分類し、学生が自らの能力や興味に応じて体系的、段階的に自由に履修できるよう配慮した。マルチメディア社会に対応して学生全員がパソコンを自由に使用できる環境を学科が提供し、それを学べるような科目を配置したことである。また、「もの造り」に興味を持たせるために、実験教育以外に簡単な回路や、ある機能を有する集積回路を設計・製作・評価するという画期的な科目を設けた。

第8期（平成9(1997)年 - 平成12(2000)年）

東海大学では、この年度よりセメスター制を導入し、学年制を廃止した。本学の歴史が始まって以来の大改革であった。これにより、永らく親んできた学生証番号の振り方も変わり、最初は戸惑いもあった。教育の内容は、セメスター制導入の前に、既に半期制を導入し、第7期の項で述べたような教育改革を実施していたので、大きな変化はなかった。むしろ、制度の上の改革が、内容の改革に追い付いたような形になった。

セメスター制が導入されて最初の卒業生が輩出された平成13(2001)年3月をもって、工学部は改組改編された。それともない通信工学科からは、かなりの先生が新学科に異動した。東海大学で歴史と伝統を誇る通信工学科は、残った先生方を注中心にして、新たに「コミュニケーション工学科」として生まれ変わるようになったのである。

通信工学科専門教育科目
1993年度生（30生）

No.1

授 業 科 目 名	必 選 別	単 位 数	学 年 ・ 学 期 ・ 時 間 数 (毎 週)								他 学 科	備 考		
			1年次		2年次		3年次		4年次					
			前	後	前	後	前	後	前	後				
専 門 基 礎 科 目	線 形 代 数	2	2											
	微 積 分	2	2											
	微 分 方 程 式	2		2										
	物 理 学	2	2									×		
	物 理 実 験	2		4								×	前期または後期	
専 門 科 目	通 信 工 学 通 論	2	2											
	電 氣 磁 気 学	2		2										
	電 氣 磁 気 学 演 習	2		2										
	電 気 回 路	2		2										
	電 気 回 路 演 習	2		2										
	電 氣 磁 気 学	2			2									
	電 氣 磁 気 学	2				2								
	電 気 回 路	2			2									
	通 信 工 学 基 礎 実 験	2			4							×		
	通 信 工 学 基 礎 実 験	2				4						×		
	電 気 回 路	2				2								
	電 子 計 測	×	2			2								
	応 用 数 学	×	2			2								
	応 用 数 学	×	2				2							
	電 子 物 性 工 学	×	2			2								
	電 子 デ バ イ ス	×	2				2							
	コ ン ピ ュ ー タ 基 礎	×	2			2								
	プ ロ グ ラ ム 言 語	×	2				2							
	電 子 情 報 通 信 技 術 文 明 論	×	2				2							
電 氣 磁 気 学 演 習	×	2				2								
電 気 回 路 演 習	×	2				2								
電 子 回 路		2					2							

通信工学科専門教育科目
1993年度生（30生）

No.2

授業科目名	必 選 別	単 位 数	学年・学期・時間数（毎週）								他 学 科	備 考		
			1年次		2年次		3年次		4年次					
			前	後	前	後	前	後	前	後				
電子回路		2						2						
通信工学実験		2						4				×		
通信工学実験		2							4			×		
ゼミナール		2						2				×		
ゼミナール		2							2			×		
情報理論	×	2						2						
デジタル信号処理	×	2						2						
パルス回路	×	2						2						
数値解析	×	2						2						
確率統計論	×	2						2						
応用数学	×	2						2						
応用数学	×	2							2					
電子回路演習	×	2						2						
システム工学	×	2							2					
集積回路工学	×	2							2					
電磁波論	×	2						2						
情報計測	×	2						2						
電波工学	×	2						2						
電子材料	×	2						2						
光通信工学	×	2							2					
衛星通信工学	×	2							2					
量子物理学	×	2							2					
情報伝送工学	×	2							2					
情報伝送工学	×	2								2				
コンピュータ回路	×	2						2						
システムプログラム	×	2						2						
情報数学	×	2						2						
ソフトウェア工学	×	2							2					

専
門
科
目

電子・
情報通信コース

コンピュータ・人工
知能コース

通信工学科専門教育科目
1993年度生（30生）

No.3

授 業 科 目 名	必 選 別	単 位 数	学 年 ・ 学 期 ・ 時 間 数 (毎 週)								他 学 科	備 考	
			1年次		2年次		3年次		4年次				
			前	後	前	後	前	後	前	後			
専 門 科 目	計 算 機 基 礎 論	×	2						2				4 年 次 開 講
	コ ン プ ュ ー タ 設 計	×	2						2				
	人 工 知 能	×	2						2				
	コ ン プ ュ ー タ 応 用	×	2							2			
	卒 業 研 究		2									×	
	音 響 工 学	×	2							2			
	電 子 応 用 機 器	×	2							2			
	情 報 変 換 工 学	×	2							2			
	法 規	×	2							2			
	ゼ ミ ナ ー ル	×	2							2		×	
	ゼ ミ ナ ー ル	×	2								2	×	
	職 業 指 導		2							2			
職 業 指 導		2								2			

区分	記号	科 目 区 分	修得すべき単位数
基礎 教育 科目	A	現代文明論	4 単位
	B	総合教育科目	1 2 単位
	C	外国語科目	8 単位
	D	体育科目	2 単位
	E	他学部・他学科	0 単位
		B ~ E	4 単位
F	専門基礎科目	必 修	1 2 単位
		選 択 必 修	0 単位
		選 択	0 単位
G	専門科目	必 修	3 6 単位
		選 択 必 修	* 2 単位
		選 択	4 0 単位
H	他学部・他学科	0 単位	
		F ~ H	4 単位
		B ~ H	0 単位
		合 計 単 位 数	1 2 4 単位

*2単位を越える専門選択必修科目の単位数を取得した場合は、専門選択科目の単位として認める。
留学生は「B 総合教育科目」を「B 日本語・日本の文化・社会、総合教育科目」とする。

1997年度 工学部通信工学科カリキュラム表

No.1

科目区分	グレード	授業科目名	修得エツク済欄	非選別	単位数	開講期間 (1週間当りコマ数)				先修条件 科目先修条件 セメスター先修条件 単位数先修条件	他学科	備考
						春	秋	春~秋	秋~春			
						学期	学期	秋	春			
F 専門基礎科目	F100	基礎数学	<input type="checkbox"/>	×	2	1						
	F100	線形代数	<input type="checkbox"/>		4	2	2					
	F100	微積分	<input type="checkbox"/>		4	2	2					
	F100	微分方程式	<input type="checkbox"/>		4	2	2					
	F100	物理学	<input type="checkbox"/>		4	2	2					
	F100	物理実験	<input type="checkbox"/>		2		同2					
	F100	化学	<input type="checkbox"/>	×	4		2					
G 専門科目	G100	通信工学通論	<input type="checkbox"/>		2	1						
	G200	基礎電気磁気学・同演習	<input type="checkbox"/>		4	同2	同2					
	G200	電気磁気学・同演習	<input type="checkbox"/>	×	4	同2						
	G200	基礎コンピュータ工学	<input type="checkbox"/>	×	2	1						
	G200	基礎電気回路・同演習	<input type="checkbox"/>		4	同2	同2					
	G200	電気回路・同演習	<input type="checkbox"/>	×	4	同2						
	G200	電子情報計測	<input type="checkbox"/>	×	2		1					
	G200	電子物性デバイス	<input type="checkbox"/>	×	4	2						
	G300	電子回路・同演習	<input type="checkbox"/>		4	同2	同2					
	G301	パルス・デジタル回路	<input type="checkbox"/>	×	4		2					
	G301	集積回路工学	<input type="checkbox"/>	×	4	2						
	G200	通信数学	<input type="checkbox"/>	×	4	2						
	G200	応用数学	<input type="checkbox"/>	×	4		2					
	G100	コンピュータ実習	<input type="checkbox"/>	×	1	1						×
	G100	コンピュータ実習	<input type="checkbox"/>	×	1		1					×
	G291	通信工学基礎実験	<input type="checkbox"/>		2	同2			3セメ			×
	G292	通信工学基礎実験	<input type="checkbox"/>		2		同2		4セメ			×
	G391	通信工学実験	<input type="checkbox"/>		2	同2			5セメ			×
	G392	通信工学実験	<input type="checkbox"/>		2		同2		6セメ			×
	G361	ゼミナール	<input type="checkbox"/>		1	1			5セメ			×
	G362	ゼミナール	<input type="checkbox"/>		1		1		6セメ			×
	G294	集積回路設計・製作	<input type="checkbox"/>	×	2		2		G301 & 6メセ			×
	G393	集積回路設計・製作	<input type="checkbox"/>	×	2	1			G294 & 7メセ			×
G300	電子機器	<input type="checkbox"/>	×	2		1						
G300	音響音声工学	<input type="checkbox"/>	×	2	1							
G300	情報工学	<input type="checkbox"/>	×	4		2						
G300	通信工学	<input type="checkbox"/>	×	4	2							

(夏期集中講義含む)

1997年度 工学部通信工学科カリキュラム表

No.2

科目区分	グレード	授業科目名	修得済欄	非選別	単位数	開講期間 (1週間当りコマ数)				先修条件 科目先修条件 セメスター先修条件 単位数先修条件	他学科	備考
						春	秋	春~	秋~			
						学期	学期	秋	春			
G 専 門 科 目	G300	情報伝送工学	<input type="checkbox"/>	×	4		2					
	G300	情報通信ネットワーク論	<input type="checkbox"/>	×	4	2						
	G300	量子物理	<input type="checkbox"/>	×	4	2						
	G300	光エレクトロニクス	<input type="checkbox"/>	×	4	2						
	G300	ソフトウェア工学	<input type="checkbox"/>	×	4	2						
	G300	デジタル信号処理	<input type="checkbox"/>	×	4	2						
	G300	コンピュータ工学	<input type="checkbox"/>	×	4	2						
	G300	コンピュータシステム	<input type="checkbox"/>	×	4	2						
	G300	電磁波論	<input type="checkbox"/>	×	4	2						
	G300	電波工学	<input type="checkbox"/>	×	4	2						
	G300	電子情報通信技術文明論	<input type="checkbox"/>	×	2		1					
	G300	電気通信法	<input type="checkbox"/>	×	2	1						
	G300	知的財産法	<input type="checkbox"/>	×	2		1					
	G621	卒業研究	<input type="checkbox"/>	×	4			1	1	7セメ& 卒業に必要な単位数のうち、100単位	×	
	G100	職業指導	<input type="checkbox"/>		4	2	2					

卒業単位数一覧

工学部通信工学科

区分	科目区分		修得すべき単位数
A	現代文明論		4単位
B	総合教育科目		12単位
C	外国語科目		8単位
D	体育科目		2単位
E (=H)	他学部・他学科科目		0単位
A~E (=H) の区分から自由に選択できる科目			4単位
F	専門基礎科目	必修	18単位
		選択	0単位
G	専門科目	必修	28単位
		選択	40単位
E (=H)	他学部・他学科科目		0単位
F~H (=E) の区分から自由に選択できる科目			8単位
A~H (=E) の区分から自由に選択できる科目			0単位
卒業単位数			124単位

2.3.3 教員組織

本学科で教育と研究に従事してきた専任の教職員の方々とその人事異動をいかに示す。

(1) 専任教員と主たる担当科目

身分は通信工学科を退任された時点におけるものである。印は物故された先生である。

身分	氏名	主な担当科目	在任期間
教授	平島 正喜	電子回路	1956-1959
教授	佐藤 達男	電気回路、電子計算機	1957-1993
教授	平岡 寛二	電子回路	1959-1963
助教授	加藤 守一	電気磁気学、	1959-1997
教授	木村 登	電気材料、電子物性工学、通信工学基礎実験	1960-2000
教授	寺本 三雄	電子回路、パルス回路	1960-1995
助教授	伊賀 義男	通信工学実験、電気計測	1960-1982
教授	谷村 功	無線工学、通信工学通論	1961-1969
教授	三原 義男	電気磁気学、電磁波論	1961-1997
教授	角田 市良	電気計測、	1961-1994
助教授	村田 忠夫	電気回路	1962-1970
教授	篠崎 壽夫	応用数学、伝送理論	1963-1994
助教授	天野 正章	電気通信数学	1963-1968
教授	矢野 創	音響工学、空中線と電波電波伝播	1963-1994
教授	松尾 守之	電気回路、電子計算機概論、プログラミング入門	1965-2001
教授	小島 紀男	電気回路、電子回路、システム工学	1965-2001
教授	飛山 圭一	電気磁気学	1965-1981
専任講師	松下 幹夫	通信工学基礎実験	1965-1978
助教授	須藤 司朗	電子回路、パルス回路	1966-2001
助教授	川副 護	電気計測、通信工学基礎実験	1967-2001
教授	森屋 俣昌	電気磁気学、光・電波工学、通信工学実験	1967-2001
助手	田森 靖二	電気工学基礎実験	1967-1970
教授	町田 東一	電気回路、伝送工学	1968-2001
教授	富山 薫順	応用数学、電気回路	1968-2001
教授	米山 正雄	電子回路	1969-1980
教授	浅利 英吉	電気磁気学、通信工学基礎実験	1969-1984
教授	白石 正	電気磁気学、電子物性	1969-2001
助教授	吉沢 将仁	電気磁気学、音響工学	1969-2001
助教授	菊川 健	電子回路、通信工学基礎実験	1970-1987
教授	東野 庄司	電子計測	1970-1994
教授	若林 敏雄	電気磁気学、応用数学	1970-2001

身分	氏名	主な担当科目	在任期間
教授	三木 容彦	電子回路	1970-1990
教授	池田 辰雄	波形伝送	1974-1997
教授	小塚 洋司	電気磁気学、電波工学	1974-2001
教授	近藤 正三	情報理論、確率統計	1974-2001
助教授	鈴木 健文	電気回路、コンピュータ応用	1975-2001
教授	吉田 正廣	電子回路、集積回路工学、通信工学基礎実験	1978-2001
教授	小野 員正	集積回路工学	1978-1989
教授	松浦 武信	電気回路、数値解析	1979-2001
助教授	熱田 清明	電気磁気学、システムプログラム	1988-2001
教授	三上 修	光通信工学、光エレクトロニクス	1994-2001
教授	川崎 繁男	電子応用機器、通信工学	1994-2001
助教授	濱本 和彦	応用数学、デジタル信号処理	1994-2001
教授	犬島 喬	電子物性工学、電子デバイス	1994-2001
教授	田中 公男	情報伝送工学、情報通信ネットワーク論	1994-2001
教授	鈴木八十二	集積回路工学、液晶デバイス工学	1995-2001
助教授	清水 尚彦	コンピュータ回路、コンピュータ設計	1995-2001
専任講師	遠藤 靖典	情報伝送工学、ソフトウェア工学	1997-2001

(2) 通信工学科人事異動

年次	記 事	学科内の人事	その他の人事
31年 (1956)	04.01 電気工学科通信工学専攻発足初代の主任教授に平島正喜教授が就任		
32年 (1957)	04.22 代々木1号館にて入学式、通信工学専攻に約80名が入学 [東京タワー完成]	01.01 佐藤達男(講師・新任)	
33年 (1958)	06.06 東海大学創立十五周年 12.28 FM東海開局	10.01 佐藤達男(助教授・昇格)	
34年 (1959)	10.01 平岡寛二(通信工学専攻主任)	10.01 平岡寛二(教授・新任) 04.01 加藤守一(助手・新任)	
35年 (1960)	03.20 通信工学専攻の第一期生27名が卒業 09.01 伊賀義男(東海電波専門学校より)	04.01 木村 登(助手・新任) 04.01 寺本三雄(助手・新任) 09.01 伊賀義男(講師・異動)	
36年 (1961)	04.01 谷村 功(通信工学専攻主任)	04.01 谷村 功(教授・新任) 04.01 寺本三雄(講師・昇格) 04.01 三原義男(助手・新任) 06.01 角田市良(助手・新任)	
37年 (1962)	04.01 相模原校舎開校、通信工学専攻の新一年生同校舎に入学	04.01 村田忠夫(助手・新任) 04.01 三原義男(講師・昇格)	
38年 (1963)	04.01 谷村 功主任教授(工学部・第二工学部長に就任) 04.01 大学院工学科電気工学専攻発足3名の学生が修士課程に入学 04.01 第二工学部電気工学通信工学専攻発足 05.08 湘南校舎、通信工学専攻の新一年生、湘南校舎に入学 05.08 矢野 創(FM東海より)	04.01 篠崎寿夫(助教授・新任) 04.01 木村 登(講師・昇格) 04.01 天野正章(助手・新任) 05.08 矢野 創(助教授・異動)	
39年 (1964)	[10.10 東京オリンピック]	11.01 角田市良(講師・昇格) 11.01 天野正章(講師・昇格)	04.01 木村 登(代々木学生課課長補佐)
40年 (1965)	04.01 松尾守之(東海大学工業高校より通信工学科へ)	04.01 寺本三雄(助教授・昇格) 04.01 飛山圭一(講師・新任) 04.01 松尾守之(助手・異動) 04.01 小島紀男(助手・新任) 04.01 松下幹夫(助手・新任)	04.01 木村 登(代々木学務課付) 04.01 谷村 功(体育部長)
41年 (1966)	04.01 電気工学科通信工学専攻を改め工学部通信工学科になる 04.01 福岡校舎開校、福岡教養部に通信工学科発足 04.01 松下 満(東海大学工業高校より通信工学科へ) 04.01 須藤司朗(補助員から教員へ)	04.01 松下 満(補助員・異動) 04.01 三原義男(助教授・昇格) 04.01 須藤司朗(助手・異動)	
42年 (1967)	04.01 札幌校舎開校、札幌教養部に通信工学科発足 04.01 川副 護(学校工場より)	04.01 小島紀男(講師・昇格) 04.01 川副 護(助手・異動) 04.01 森屋俣昌(助手・新任) 04.01 田森靖二(助手・新任)	

年次	記 事	学科内の人事	その他の人事
43年 (1968)	04.01 飛山圭一（第二工学部通信工学専攻の副主任に就任）	03.31 天野正章（講師・退職） 04.01 佐藤達男（教授・昇格） 04.01 木村 登（助教授・昇格） 04.01 町田東一（講師・新任） 04.01 加藤守一（講師・昇格） 04.01 森屋俣昌（講師・昇格） 04.01 鳥居薫順（助手・新任） 04.01 村田忠夫（助教授・昇格）	04.01 米山正雄（産業科学研究所次長）
44年 (1969)	03.31 谷村 功（東海大学東京短期大学部部長に就任） 04.01 米山正雄（大学院電気工学専攻通信専攻、通信工学科、第二工通信専攻の主任を兼任） 11.01 9号館落成、代々木より大部分の研究室移転、研究活動の基礎が固まる、同時に無音響室完成	04.01 篠崎寿夫（教授・昇格） 04.01 矢野 創（教授・昇格） 04.01 浅利英吉（講師・新任） 04.01 白石 正（助手・新任） 04.01 吉澤将仁（助手・新任）	04.01 飛山圭一（第二工学部学務課長） 04.01 三原義男（湘南教務課長） 10.23 町田東一（工学博士取得）
45年 (1970)	04.01 米山正雄（大学院工学研究科委員長代理及び工学部、第二工学部部長代理を兼任） 04.01 工学部では、福岡、札幌両校舎の充実のため、若手教員を2～4年の期間両校舎に派遣することを決定し、通信工学科の第一陣として松尾講師が福岡校舎へ赴任 04.01～04.04 電気四学会連合全国大会が湘南校舎で行われた 04.01 菊川 健（FM東海より） [よど号事件、大阪万博]	03.31 田森靖二（退職） 03.01 村田忠夫（助教授・退職） 04.01 東野庄司（教授・新任） 04.01 町田東一（助教授・昇格） 04.01 松尾守之（講師・昇格） 04.01 菊川 健（講師・異動） 04.01 川副 護（講師・昇格） 04.01 白石 正（講師・昇格） 04.01 若林敏雄（助手・新任）	04.01 三原義男（教務部次長） 04.01 矢野 創（教務部次長）
46年 (1971)	12.01 小川忠男（実験補助員を解き技術員になる）	04.01 三原義男（教授・昇格） 04.01 伊賀義男（助教授・昇格） 04.01 大貫 信（講師・新任） 09.01 富樫孝雄（実験補助員・新任）	04.01 松尾守之（福岡学務課付） 04.01 町田東一（教務部計算センター代々木分室長）
47年 (1972)	03.31 松尾守之（福岡校舎より帰任） 04.01 白石 正（福岡校舎へ出向） 04.01 木村 登（通信工学科副就任） 05.01 寺本三雄（タイ国・モンクット王立工科大学へ出向） （あさま山荘事件） 12.18 小田急大根駅に急行全面停車が実現	04.01 三木容彦（講師・新任） 04.01 寺本三雄（教授・昇格） 04.01 森屋俣昌（助教授・昇格） 04.01 小島紀男（助教授・昇格） 04.01 鳥居薫順（講師・昇格）	
48年 (1973)	10.01 代々木主任教授室に代々木総務課より藤田康子来向 04.01 矢野 創湘南校舎から代々木校舎へ移行 03.31 小川忠男（通信工学科から湘南校舎技術課へ異動） 06.02 寺本三雄（コロポ計画に基づく訪問教授としてタイ国モンクット王工科大学へ） 06. 孀恋研修センター開館	03.31 大貫 信（講師・退職） 04.01 松尾守之（助教授・昇格） 04.01 菊川 健（助教授・昇格） 04.01 浅利英吉（助教授・昇格） 04.01 松下幹夫（助教授・昇格） 04.01 藤田康子（事務員・異動）	04.01 川副 護（代々木学務課課長補佐） 04.01 三原義男（大学システム化室次長兼務） 04.01 矢野 創（学務部付兼大学課長補佐、教務部次長、技術課長）

年次	記 事	学科内の人事	その他の人事
49年 (1974)	03.31 白石 正 (福岡校舎より帰任) 04.01 三木容彦 (福岡校舎へ移動) 11.01 永年勤続 15年 加藤守一 10年 川副 護 08.03 航空宇宙科学博物館三保に開設	04.01 池田辰雄 (教授・新任) 04.01 小塚洋司 (講師・新任) 04.01 近藤正三 (助教授・新任) 04.01 白石 正 (助教授・昇格) 04.01 木村 登 (教授・昇格) 04.01 吉澤将仁 (講師・昇格) 04.01 高橋賢司 (一級技術員・委嘱新任) 04.01 松田年生 (技術補助員・新任)	04.01 川副 護 (代々木学務課付) 04.01 矢野 創 (大学入試事務室長)
50年 (1975)	02.17 医学部付属病院開院 07.15 米山正雄 (九州大学名誉教授になる) 08.15 ~ 09.04 木村 登第2回東海大学 夏季研修旅行 (ヨーロッパの工業と電気の歴史をたずねて) 11.01 永年勤続 25年 伊賀義男 15援 寺本三雄、矢野 創 10年 小島紀男 12.03 三保研修館落成	04.01 鈴木健文 (講師・新任) 04.01 加藤守一 (助教授・昇格) 04.01 飛山圭一 (教授・昇格) 04.01 若林敏雄 (講師・昇格) 10.01 松下 満 (二級技術職員・昇格)	
51年 (1976)	08.23 ~ 09.05 松尾守之(本学主催工学部電気系企画の夏季研修旅行「アメリカ、カナダの電子工業の現状視察」に副団長として学生を引率) 11.01 永年勤続 15年 三原義男、松尾守之 菊川 健、角田市良 須藤司朗、松下 満 10年 白石 正	03.31 栗原アヤ子 (技術補助員・退職) 03.31 野林春男 (二級技術員・退職) 04.01 町田東一 (教授・昇格) 04.01 川副 護 (助教授・昇格) 04.01 天野美貴子 (技術補助員・新任) 04.01 坂本功一 (技術補助員・新任)	04.01 三原義男 (情報システム部長)
52年 (1977)	05.03 通信工学科の同窓会組織である東海大学通信工学会結成され初代会長に松尾守之が就任 07.22 ブタベスト工科大学とのシンポジウム開催 11.01 永年勤続 20年 佐藤達男	04.01 松下 満 (一級技術職員・昇格)	04.01 矢野 創 (国際部次長)
53年 (1978)	11.01 永年勤続 15年 篠崎寿夫 10年 町田東一、富山薫順	03.31 飛山圭一 (教授・退職) 04.01 須藤司朗 (講師・昇格) 04.01 三木容彦 (助教授・昇格) 04.01 吉田正廣 (助手・新任) 04.01 小野員正 (教授・新任) 04.01 飛山圭一 (教授・委嘱) 04.01 松田年生 (二級技術職員・昇格) 04.01 望陀匡輔 (二級技術職員・新任)	04.01 三原義男 (教務部長) 04.01 松下幹夫 (大学病院医事課課長補佐)
54年 (1979)	03.31 東海大学工学部三十五周年史発刊 02.27 ~ 04.09 矢野 創 (第11回海外研修航海団長) 04.01 池田辰雄 (第二工学部主任) 04.01 川副 護 (第二工学部副主任) 12.01 永年勤続 20年 加藤守一 15年 川副 護 10年 吉澤将仁 [日航ジャンボ機墜落]	04.01 富山薫順 (助教授・昇格) 04.01 角田市良 (助教授・昇格) 04.01 松浦武信 (助手・新任) 04.01 高橋賢司 (特任技術員・新任)	03.25 白石 正 (工学博士取得) 04.01 川副 護 (学務局研究計画部研究計画課長)

年次	記 事	学科内の人事	その他の人事
55年 (1980)	02.26 ~ 4.11 松下 満 (第12回海外研修航海団役員) 11.01 永年勤続 30年 伊賀義男 15年 小島紀男 10年 東野庄司, 若林敏雄 07.20 ~ '81.03.30 白石 正 (アメリカのマサチューセッツ工科大学に訪問研究員として滞在)	03.31 米山正雄 (定年・退職) 04.01 小塚洋司 (助教授・昇格)	04.01 三原義男 (外国語教育センター次長) 10.09 三木容彦 (工学博士取得)
56年 (1981)	02.26 ~ 03.15 小島紀男 (本学工学部電気系学科欧州研修旅行に副団長として学生を引率) 03.01 永年勤続 20年 三原義男, 松尾守之, 菊川健 角田市良, 須藤司朗, 松下満 15年 白石 正	04.01 松浦武信 (定年・退職) 05.11 飛山圭一 (死亡・退職)	04.01 三原義男 (学長室長) 04.01 三原義男 (外国語教育センター長) 10.03 鈴木健文 (工学博士取得)
57年 (1982)	11.01 永年勤続 25年 佐藤達男 12.01 三保社会教育センターが社会教育センタと名称変更	03.31 伊賀義男 (定年・退職) 04.01 吉澤将仁 (助教授・昇格)	04.01 町田東一 (大学電子計算センター代々木分室長、情報システム部代々木分室長) 05.10 三原義男 (学事部長)
58年 (1983)	09.18 第3回通信工学会総会 11.01 永年勤続 20年 篠崎寿夫 15年 町田東一、富山薫順	04.01 松丸賢一 (特任技術員・新任) 04.01 鈴木健文 (助教授・昇格)	03.25 松浦武信 (工学博士取得)
59年 (1984)	02.22 平岡寛二名誉教授逝去 04.02 医学部付属大磯病院が開院 04.29 米山正雄 (勲三等旭日中綬章受賞) 10.04 平島正喜元主任教授逝去 10.16 篠原 登名誉教授逝去 11.01 永年勤続 25年 加藤守一 10年 池田辰雄, 小塚洋司, 近藤正三 11.01 松前記念館が完成	03.31 天野美貴子 (技術補助員・退職) 04.01 小塚洋司 (教授・昇格) 04.01 白石 正 (教授・昇格) 04.01 若林敏雄 (助教授・昇格) 04.01 吉田正廣 (講師・昇格) 04.01 山口裕子 (技術補助員・新任)	04.01 矢野 創 (理事長室国際部次長)
60年 (1985)	04.01 篠崎寿夫 (通信工学主任) 04.01 木村 登 (通信工学副主任) 04.01 永年勤続 25年 寺本三雄, 木村 登, 矢野 創 20年 小島紀男 15年 東野庄司, 若林敏雄	04.01 宮下洋子 (二級技術員・昇格) 04.01 松田年生 (一級技術員・昇格) 04.01 望陀匡輔 (一級技術員・昇格) 04.01 松浦武信 (助教授・昇格) 04.01 小島紀男 (教授・昇格) 04.01 三木容彦 (教授・昇格)	03.25 小島紀男 (工学博士取得) 04.01 矢野 創 (外国語教育センター次長)
61年 (1986)	04.01 市川兼蔵, 東京短大より出向 04.01 川副 護 (電気工学科通信工学専攻副主任) 10.06 12号館落成 11.01 永年勤続 25年 三原義男, 松尾守之, 菊川健 角田市良, 須藤司朗, 松下満 20年 白石 正	04.01 松尾守之 (教授・昇格) 04.01 近藤正三 (教授・昇格)	03.25 松尾守之 (工学博士取得) 03.25 若林敏雄 (工学博士取得) 04.01 三原義男 (学務局企画室長) 04.01 町田東一 (付属図書館湘南6,12号館分館長) 04.01 松尾守之 (東京短大電気通信工学科情報処理コース主任)

年次	記 事	学科内の人事	その他の人事
62年 (1987)	04.01 町田東一(通信工学科主任) 04.01 小島紀男(通信工学科副主任) 04.01 宮下洋子(電気工学科通信工学科へ) 04.01 佐藤達男,寺本三雄,角田市良,須藤司朗,吉澤将司,森屋倣昌(代々木校舎から湘南校舎へ移籍) 04.01 吉田正廣(湘南校舎から代々木校舎へ) 04.01 久津間伸子(情報技術センターへ移籍) 11.01 永年勤続 30年 佐藤達男 20年 森屋倣昌 15年 宮下洋子	03.31 池田辰雄(定年・退職) 03.31 菊川 健(退職) 03.31 米山正雄(特任・退職) 04.01 須藤司朗(助教授・昇格) 04.01 滝田 澄(第二工学部・新任) 05.14 池田辰雄(逝去) 10.01 宮下洋子(主任待遇・昇格) 宮下洋子、山口裕子(技術員から事務員へ職種変更)	04.01 矢野 創(法人局国際部長) 04.01 三原義男(大学学長補佐) 04.01 木村 登(付属図書館湘南12号館分館長)
63年 (1988)	04.01 ~'89.03.31 松浦武信(英国工セツクス大学に訪問研究員として滞在) 04.01 市川兼蔵,東京短大へ帰任 11.01 永年勤続 30年加藤守一 25年 川副 護 15年 小塚洋司、近藤正三 10年 松浦武信	04.01 若林敏雄(教授・昇格) 04.01 熱田清明(助手・新任) 04.01 香月康則(二級技術員・新任)	03.25 熱田清明(工学博士取得) 04.01 矢野 創(ヨーロッパ学術センター所長) 05.30 三原義男(大学評議員) 11.01 富山薫順(工学博士取得)
64年 平成 1年 (1989)	01.07 平成になる 04.01 ~'90.03.31 松尾守之(ブタベスト工科大学客員教授として滞在) 11.01 永年勤続 25年 篠崎寿夫 20年 富山薫順、町田東一 10年 小野員正,吉田正廣,清水克実 松田年生,望陀匡輔 [小田急線大根駅は東海大学前駅と改称、ベルリンの壁崩壊]	03.31 小野員正(定年・退職) 04.01 内田 聡(特任技術員・新任) 04.01 熱田清明(講師・昇格) 04.01 富山薫順(教授・昇格)	04.01 三原義男(学務局企画室長) 04.01 川副 護(学務局研究計画部付)
2年 (1990)	04.01 工学部福岡教養部廃止,福岡短期大学となる 10.01 通信工学科OBによる講義が始まる(電子情報通信技術文明論) 11.01 永年勤続 30年 寺本三雄,木村 登 25年 小島紀男 20年 東野庄司,若林敏雄	04.01 吉田正廣(助教授・昇格) 04.01 松下 満(技師補・昇格) 06.17 山口優子、伊地知優子に改姓	04.01 三原義男(外国語教育センター長) 09.19 吉田正廣(工学博士取得)
3年 (1991)	04.01 香月康則(入試センター-入試企画課へ移籍) 04.01 村田信一(東京短大から通信工学科へか移籍) 04.01 ~'92.3.19 若林敏雄(カリフォルニア大学ロサンゼルス校に訪問研究員として滞在) 08.25 松前重義総長・逝去 05.01 永年勤続 30年 松尾守之,角田市良,須藤司朗,松下 満 25年 白石 正	03.31 香月康則(二級技術員・異動) 03.31 松丸賢一(特任技術員・退職) 04.01 糠沢英雄(特任技術員・新任) 04.01 松浦武信(教授・昇格) 04.01 村田信一(二級技術員・異動)	04.01 矢野 創(パシフィックセンター所長兼務) 04.20 矢野 創(ホノルル校校長) 04.01 三原義男(北海道東海大学学長) 11.01 三原義男(北海道東海大学工学部電子情報工学科教授)

年次	記 事	学科内の人事	その他の人事
4年 (1992)	01.13 牧野不二夫先生逝去 04.01 鈴木健文福岡校舎より帰任 04.01 清水克実(教学課より通信工学科へ) 04.01~'93.03.31 近藤正三(フランス国立情報・制御研究所に訪問研究員として滞在) 05.01 学園シンボルマーク決定(Tウェーブ) 09.21 14号館竣工 11.01 永年勤続 35年 佐藤達男 25年 森屋倣昌 20年 宮下洋子	03.31 伊地地裕子(事務職員・退職) 03.31 内田 聡(特任技術員・退職) 04.01 村田信一(一級技術員・昇格) 04.01 熱田清明(助教授・昇格)	04.01 川副 護(研究推進部次長)
5年 (1993)	04.01 カリキュラムの完全半期制実施 04.01 吉田正廣第二工より帰任 04.01 寺本三雄(通信工学科主任) 04.01 近藤正三(通信工学科副主任) 11.01 東海大学創立50周年 11.01 永年勤続 30年 篠崎寿夫 25年 富山薫順、町田東一 15年 吉田正廣、清水克実、松田年生	03.31 佐藤達男(定年・退職) 04.01 加瀬尚子(二級技術員・新任)	04.01 川副 護(研究推進本部研究計画課沼津分室長事務取扱) 10.01 森屋倣昌(工学博士取得) 04.01 三原義男(北海道東海大学大学院運営委員長・学長室長)
6年 (1994)	02.16~04.04 若林敏雄 第26回海外研修航海副団長 04.01 町田東一東京短期大学へ 08.15~'95.03.31 吉田正廣(カリフォルニア大学ロサンゼルス校に訪問研究員として滞在) 11.01 永年勤続 35年 加藤守一 30年 川副 護 25年 吉澤将司 20年 小塚洋司、近藤正三 15年 松浦武信	03.31 矢野 創(定年・退職) 03.31 篠崎寿夫(定年・退職) 03.31 東野庄司(定年・退職) 03.31 角田市良(定年・退職) 04.01 森屋倣昌(教授・昇格) 04.01 三上 修(教授・新任) 04.01 川崎繁男(助教授・新任) 04.01 濱本和彦(助手・新任) 04.01 犬島 喬(第二工学部・新任) 04.01 田中公男(第二工学部・新任)	04.01 町田東一(学長補佐、情報通信技術研究所長、電気通信工学科・情報処理工学科一部二部主任)
7年 (1995)	04.01 近藤正三(通信工学科主任) 04.01 若林敏雄(通信工学科副主任) 04.01 田中公男(第二工副主任) 04.01 鈴木健文(第二工より帰任) 04.05 15号館竣工 04~'96.03 小塚洋司(ハーバード大学に客員教授として滞在) 11.01 永年勤続 35年 寺本三雄、木村登 30年 小島紀男 25年 若林敏雄 [01.17 阪神大地震] [03.15 地下鉄サリン事件]	03.31 寺本三雄(定年・退職) 04.01 吉田正廣(教授・昇格) 04.01 加瀬尚子(技術員・昇格) 04.01 鈴木八十二(教授・新任) 04.01 清水尚彦(講師・新任) 04.01 濱本和彦(講師・昇格)	04.01 矢野 創(名誉教授任命)
8年 (1996)	03.09~12.08 若林敏雄(タイ国・モンクット王工科大学ラカバン校にJICA個別専門家として滞在) 05.01~'97.3 熱田清明(アメリカ・イリノイ大学に留学) [東海大学丸世界一周] 11.01 永年勤続 35年 松尾守之、須藤司朗、松下 満 30年 白石 正 10年 村田信一	04.01 青木志延(二級職員・新任)	04.01 近藤正三(副学部長・研究推進本部次長)

年次	記 事	学科内の人事	その他の人事
9年 (1997)	04.01 セメスター制スタート 04.01 若林敏雄(通信工学科主任) 04.01 富山薫順(通信工学科副主任) 04.01 田中公男(第二工部電気工学科通信専攻副主任) 11.01 永年勤続 30年 森屋俣昌	03.21 加藤守一(退職) 03.31 三原義男(定年・退職) 04.01 松田年生(技師補・昇格) 04.01 村田信一(上級技術員・昇格) 04.01 清水尚彦(助教授・昇格) 04.01 遠藤靖典(講師・新任)	04.01 三原義男(名誉教授任命) 04.01 東野庄司(名誉教授任命)
10年 (1998)	01.10~'99.03.10 森屋俣昌(タイ国、キングモンクット王工科大学ラカバン校にJICA長期専門家として滞在) 03.27~03.30 電子情報通信学会全国大会湘南校舎で開催 04.01 鈴木健文(第二工学部へ移籍) 04.01 若林敏雄(大学院研究科電気工学専攻主任) 04.01 富山薫順(通信工学科主任) 04.01 鈴木八十二(通信工学科副主任) 04.01 町田東一(東京短期大学工学部より帰任) 04.01 犬島 喬(第二工より帰任) 11.01 永年勤続 30年 富山薫順、町田東一 20年 吉田正廣、清水克実 松田年生	04.01 川崎繁男(教授・昇格) 04.01 戸塚隆夫(特任技術員・新任)	04.01 川副 護(研究開発部次長)
11年 (1999)	02.09 米山正雄名誉教授逝去 03.05~'00.03.28 松尾守之(タイ国、キングモンクット王工科大学ラカバン校にJICA長期専門家として滞在) 04.01 近藤久美子(一級事務職員・教学課より通信工学科へ) 04.01 宮下洋子(主査・教学部事務室へ) 05.15 坂本 巖(通信工学会会長・逝去) 11.01 永年勤続 30年 吉澤将司 20年 松浦武信	04.01 濱本和彦(助教授・昇格)	04.01 篠崎壽夫(名誉教授任命)
12年 (2000)	04.01 田中公男(通信工学科副主任) 04.01 鈴木健文(第二工部電気工学科通信専攻副主任) 17号館竣工 09.24 篠崎壽夫(名誉教授・逝去) 11.01 永年勤続 35年 小島紀男 30年 若林敏雄 12.25 寺本三雄(タイ国より勲四等(功労賞)授与)	03.31 木村 登(定年・退職) 04.01 青木志延(一級職員・昇格)	04.01 寺本三雄(名誉教授任命)

年次	記 事	学科内の人事	その他の人事
13年 (2001)	02.17～04.09 富山薫順 第32回海外研修航海団長 04.01 工学部改組改変 電子情報学部発足 通信工学科はコミュニケーション工学科に改組 松尾守之、近藤正三、熱田清明 濱本和彦（情報メディア学科へ移籍） 遠藤靖典（情報科学科へ移籍） 川崎繁男（電気電子工学科へ移籍） 鈴木八十二、犬島 喬（エレクトロニクス 学科へ移籍） 04.01 青木志延(大学評価室へ移動) 04.01 近藤久美子(体育学部へ移動) 04.01 松下 満、松田年生、村田信一 戸塚隆夫（工学部技術職員・研究推進部技術支援課へ移籍） 04.01 清水克実（電子情報学部所属になる） 04.01 永年勤続 40年 松尾守之、須藤司朗、松下 満 35年 白石 正 15年 村田信一 [02.15えひめ丸沈没] (松前重義先生生誕100年記念) [09.11ニューヨークテロ事件]	04.01 村田信一（技師補・昇格） 04.01 青木志延（一級職員・移動） 04.01 近藤久美子（一級職員・移動）	04.01 富山薫順（電子情報学部コミュニケーション工学科主任）

2.3.4 教育、実験、研究設備

本学科は、代々木校舎時代は場所の関係や大学が未だ揺籃期であったため、大きな機材は導入できなかった。しかし、湘南に移転し、9号館に研究の拠点が移ると、それに合わせ機材の導入も進んだ。その中でも、無響室は音響関係の設備として当時、他に類を見ない程の立派な設備として9号館に併設する形で設置された。その後、コンピュータの発展につれて各種のPCが導入されたが、昭和59年に導入された汎用画像処理装置は、50メガバイトのハードデスクを装備した当時としては最高級機であった。ソフトウェアだけでも300万円した。

本学科では、平成3(1991)年に学科内コンピュータ・ネットワークを構築し、9号館内の全ての研究をLANで接続した。また、実験室とは別個にEWS（エンジニアリング・ワークステーション）用のコンピュータ室を作り、サン・マイクロシステムズのEWSを6台設置した。この本学科のコンピュータ室では、Fortran,C言語、LSIシミュレータ等のソフトを活用し、卒研究生、大学院生、教職員が研究に励んでいる。学部の3、4年生ではこの設備を活用した実験も行っている。また、学科内の事務連絡や、学生からのレポートの受け渡しなどにもLANを積極的に利用して、研究、事務処理の効率化を計っている。

一方、湘南校舎を中心とする本学の電子計算センターも、1991年より全面的にUNIXシステムに移行し、スーパー・コンピュータから各種ホストコンピュータまで、同じOS環境が実現した。また、湘南校舎の各号館が光LANで接続され、研究や学生の教育に威力を発揮している。

図 - 1は 通信工学科のワークステーションのシステム構成図である。

本学科でこれまで導入した教育、研究用の機材のうち、主なものを下記に列挙した。

機 材 名	製造会社	金額 (千円)	購入年
スペクトルアナライザー	安立電気	3,170	昭和57年
光スペクトルアナライザー	安藤電気	20,280	昭和59年
汎用画像処理装置TVK2000	日本アビオニクス	8,800	昭和59年
スペクトルアナライザー	安立電気	3,600	昭和60年
L F インピーダンスアナライザー	横河ヒューレット	3,470	昭和60年
周波数変換器	安立電気	2,865	昭和60年
430MHz高周波増幅装置	サムウエイ	2,700	昭和60年
赤外線映像装置	日本アビオニクス	5,000	昭和61年
光 P C M 通信実験装置	安藤電気	8,446	平成元年
赤外線分光光度計	島津製作所	12,910	平成元年
ワークステーション	サンマイクロ	89,121	平成 3 年
光ファイバー式温度計	アステック	3,090	平成 4 年
オシロスコープ	ソニーテクトロ	5,631	平成 4 年
3次元形状計測装置	三菱電機	4,274	平成 4 年
MBE総置	エイコー	38,000	平成 5 年
ホイスラーモードCVD装置	カルソニック	14,000	平成 6 年
機能性光インターコネクション	米国ヒューレット	9,120	平成 8 年
ワークステーション	米国サンマイクロ	2,520	平成 8 年
触針式表面形状測定器	日本真空技術	4,800	平成 8 年
ワークステーション	日本ヒューレット	6,193	平成 8 年
ロジックアナライザー	米国ヒューレット	9,980	平成 8 年
波長可変レーザ光源	日本ヒューレット	3,780	平成 9 年
超音波ウェッジワイヤーボンダー	ウェストボンド	2,362	平成10年

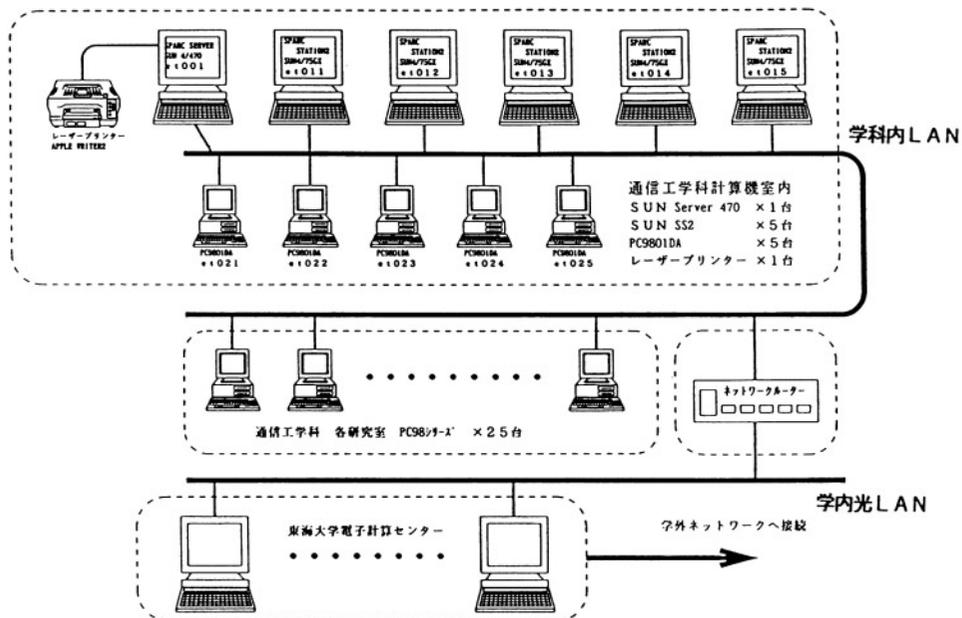
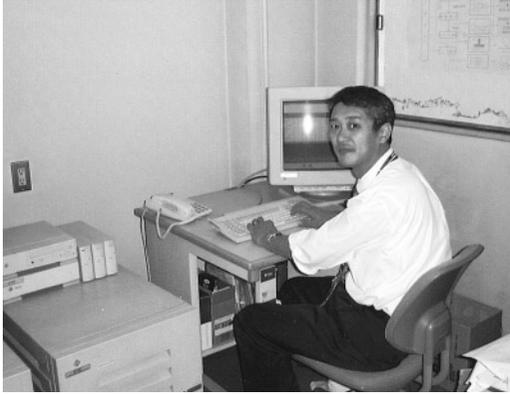
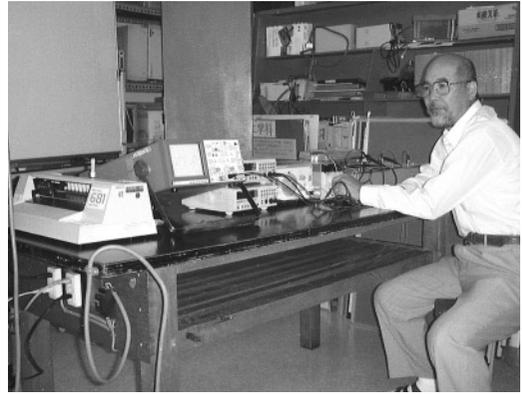


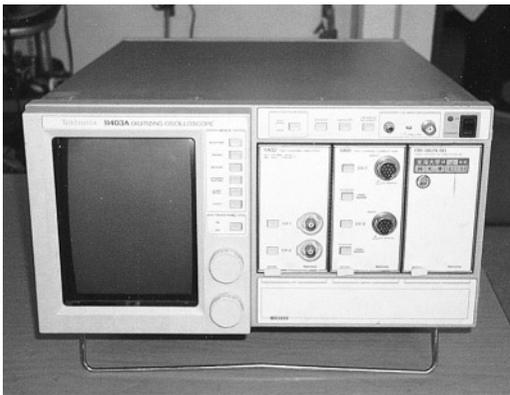
図 - 1 通信工学科 ワークステーションシステム構成図



電子回路設計ワークステーションシステムを
操作する村田信一技師補



PCM伝送装置を操作する松下 満技師補



オシロスコープ



通信工学科コンピュータ室でEWSを操作する
村田信一技師補と清水克美事務職員

2.3.5 学生数の推移

昭和35(1960)年から平成13(2001)年の43年間に、実際に卒業した人数は9,787人である。改変が行われた時点で2年次生だった学生が最後に卒業する予定の数(450人)を加えると、総数は一万人を超えることとなる。

この内訳を、平成13年3月現在で世代別にみると、概算で、

60歳代	250人
50歳代	2,300人
40歳代	2,700人
30歳代	2,800人
20歳代	1,600人

となる。

卒業年度	人数	卒業年度	人数	卒業年度	人数
昭和35(1960)年	27	昭和50(1975)年	250	平成2(1990)年	289
昭和36(1961)年	69	昭和51(1976)年	286	平成3(1991)年	298
昭和37(1962)年	83	昭和52(1977)年	271	平成4(1992)年	214
昭和38(1963)年	80	昭和53(1978)年	258	平成5(1993)年	242
昭和39(1964)年	149	昭和54(1979)年	287	平成6(1994)年	205
昭和40(1965)年	96	昭和55(1980)年	267	平成7(1995)年	207
昭和41(1966)年	187	昭和56(1981)年	310	平成8(1996)年	230
昭和42(1967)年	221	昭和57(1982)年	289	平成9(1997)年	192
昭和43(1968)年	264	昭和58(1983)年	274	平成10(1998)年	221
昭和44(1969)年	278	昭和59(1984)年	287	平成11(1999)年	204
昭和45(1970)年	349	昭和60(1985)年	289	平成12(2000)年	192
昭和46(1971)年	272	昭和61(1986)年	291	平成13(2001)年	150
昭和47(1972)年	250	昭和62(1987)年	296	平成14(2002)年	(150)卒業予定
昭和48(1973)年	278	昭和63(1988)年	323	平成15(2003)年	(150)卒業予定
昭和49(1974)年	275	平成元(1989)年	287	平成16(2004)年	(150)卒業予定

2.3.6 就 職

情報通信技術の発達は、人工衛星によるテレビや電話の中継を可能にし、一方ではコンピュータやインターネットの急速な普及を促した。こうした技術革新の中にあつて、本学科の卒業生は、情報通信関連の官公庁、情報通信機器の製造業、通信にかかわる建設、保守、運用等に携わる企業、旧電電公社、現在のNTT、あるいは、民営化された通信会社、NHKをはじめとする放送局、民放、さらにコンピュータの製造会社や、ソフトウェア関連の企業、サービス産業といわれる情報産業へと幅広い就職の選択を可能にした。

昭和30年代、すなわち、高度成長経済が離陸しようとしていた頃、日本の各地に放送局やその中継局が次々に開局していった。また、カラー・テレビの放送開始の時期とも重なつて、本学科の卒業生の多くはNHKやF M東京を含む民間放送局に巣立っていった。一方、テレビや家庭電化製品の普及速度はめざましく、それにともなつて、大手の電気メーカーや、それに関連する中小の製造会社に求人が集まつた。

やがて、テレビの普及が一段落し、また、放送機器の自動化が進むにつれて求人の様相も変わつてきた。すなわち、半導体技術の時代になり、トランジスタ・ラジオやテープレコーダ等、オーディオ関連の製造業に多くの卒業生が流れていった。

昭和40年代に入ると、大型コンピュータの時代になつた。コンピュータのハードウェアを作る電子産業や、ソフトウェアを開発する企業へ、求人の主力が移つていった。特に、コンピュータを利用している大手のスーパーや、輸送会社、あるいは、コンピュータ関連用品を扱う企業が花形となつてきた。

半導体技術の発達は、コンピュータの小型化を促した。一方、電電公社の民営化と新規の電話会

社の設立によって、わが国における情報通信産業の様相は、ドラスティックに変化した。その究極は、近年、急速に小型化したパーソナルコンピュータや、携帯電話、それに、民営化と競争原理の導入による通信コストの低廉化が新たなビジネスチャンスを増やした。特に、ソフトウェア技術者の不足は大きな問題となっていた。このような社会情勢の中で、本学科は常に時代を先取りしたカリキュラムを編成し、その一方で、知識の詰め込みだけでなく、創造性豊かな、そして、見識の高い技術者になれるように学生を教育した。今日ではその成果が実って、次の表に見るように、あらゆる産業に優秀な人材を送り出すことができた。

通信工学科の主な就職先一覧

下記は、通信工学科の1992年～2001年度に卒業し、就職した主な企業と人数です。

㈱I H Iシステムズ	2	㈱F F C	1	㈱クレスコ	1
㈱アイ・エス・ピー	3	エムエス情報システム㈱	3	ケーブルワイヤレスI D C㈱	1
㈱アイエックス	3	㈱L C V	2	ケル㈱	1
アイワ㈱	1	㈱オーエー研究所	1	㈱ケンウッド	3
旭硝子㈱	4	㈱オーディオテクニカ	3	国際システム㈱	4
㈱アドバンスト・テクノロジー	3	大阪メディアポート㈱	1	国際電気㈱	3
㈱アルファシステムズ	13	大崎コンピュータエンジニアリング	2	コナミ㈱	1
アルプス電気㈱	6	㈱沖コムテック	5	コニカ㈱	2
安藤電気㈱	2	沖通信システム㈱	5	札幌テレビ放送㈱	2
アンリツ㈱	2	沖電気カスタマアドテック㈱	3	佐鳥電機㈱	1
岩崎通信機㈱	1	沖電気工業㈱	17	㈱三技協	3
入一通信工業㈱	4	沖電気工事㈱	4	三信電気㈱	1
㈱インテック	1	㈱沖ビジネス	1	三波工業㈱	2
N E Cソフト㈱	2	オムロン㈱	1	三洋電機㈱	2
N E Cフィールディング㈱	3	オムロンアルファテック㈱	1	三和エンジニアリング㈱	2
N E C東芝情報システム㈱	1	㈱神奈川ハイテクサービス	2	㈱シーイーシー	1
N E Cマイクロシステム㈱	3	カルソニックカンセイ㈱	3	㈱C S K	8
N H Kアイテック㈱	8	川崎電気㈱	1	㈱ジェイコス	10
㈱N H Kテクニカルサービス	1	関西テレビ放送㈱	1	J - フォン東日本㈱	7
N S K㈱	3	神田通信機㈱	1	㈱芝通	2
N T T東日本㈱	9	神田通信工業㈱	3	島田理化学工業㈱	2
N T Tアドバンステクノロジー㈱	9	キャノン㈱	6	㈱シャープ	1
㈱N T Tドコモ	7	キャノンソフトウェア㈱	1	首都圏松下テクニカルサービス㈱	3
N T Tエレクトロニクス㈱	5	協栄産業㈱	6	首都高速道路公団	2
N T Tシステム開発㈱	7	京セラ㈱	4	㈱昭電	6
N T Tシステム技術㈱	3	京セラコミュニケーションシステム㈱	2	湘南ケーブルネットワーク㈱	2
N T Tシステムサービス㈱	1	協和エクシオ㈱	20	新晃工業㈱	4
N T Tソフトウェア㈱	5	近畿通信建設㈱	2	新興サービス㈱	3
N T T中央パーソナル通信網㈱	1	㈱きんでん	1	新興通信建設㈱	2
㈱N T Tデータ	2	クラリオン㈱	6	新電元工業㈱	2
㈱N T T - T E東京	2	㈱クレオ	1	住友電設㈱	7

住友電工通信エンジニアリング(株)	9	東京放送(株) (T B S)	2	日本N C R(株)	1
(株)スリーエーシステムズ	3	東計電算(株)	2	日本エリクソン(株)	3
セイコーエプソン(株)	2	東光(株)	2	日本オリベッティ(株)	1
西部電気工業(株)	1	(株)東芝	9	日本ケミコン(株)	8
(株)セガエンタープライゼス	3	東芝ITコントロールシステム(株)	1	日本工営(株)	1
セコム情報システム(株)	1	東芝L S Iシステムサポート(株)	8	日本航空電子工業(株)	7
全国朝日放送(株)	3	東芝デジタルメディア		日本コムシス(株)	8
セントラルエンジニアリング(株)	2	エンジニアリング(株)	2	日本コロニア(株)	2
セントラル警備保障(株)	1	東芝情報システム(株)	6	日本システムウェア(株)	5
セントラル電子制御(株)	5	東芝通信システム建設(株)	8	日本システム技術(株)	2
全日警(株)	4	東芝デバイス(株)	4	日本システムデベロップメント(株)	1
全日本空輸(株)	2	東芝電波特機(株)	1	日本信号(株)	2
ソニー(株)	9	東芝マイクロエレクトロニクス(株)	2	日本デジタルエクイップメント(株)	3
ソニーデジタルプロダクツ(株)	1	東信電気(株)	2	(株)日本デジタル研究所	4
ソフトウェア興業(株)	7	(株)東電通	5	日本テレコム(株)	4
大栄電気(株)	4	東北通信建設(株)	1	日本テレビ放送網(株)	3
(株)大興電機製作所	4	東洋通信機(株)	3	日本電気(株)	1 8
大興電子通信(株)	1	東横システム(株)	3	日本電気移動通信(株)	4
大同信号(株)	4	東立通信工業(株)	3	日本電気エンジニアリング(株)	1 2
大日本印刷(株)	4	東和エンジニアリング(株)	3	日本電気システム建設(株)	1 1
大日本L S Iデザイン(株)	3	東和メックス(株)	5	日本電気情報サービス(株)	2
大明(株)	1 8	ドコモエンジニアリング(株)	1 1	日本電気精機エンジニアリング(株)	3
太陽誘電(株)	1	ドコモモバイル(株)	1	日本電気通信システム(株)	7
千歳電気工業(株)	7	凸版印刷(株)	1	日本電気テレコムシステム(株)	2
(株)ソーカーセルラー東京	3	トム通信工業(株)	2	日本電気電波機器エンジニアリング(株)	3
(株)つうけん	2	トヨタ自動車(株)	1	日本道路公団	1
都築通信技術(株)	1	トランスコスモス(株)	2	日本トーター(株)	2
D D I東京ポケット電話(株)	1	(株)トランスネット	1	日本ビクター(株)	3
T D K(株)	3	長野日本電気ソフトウェア(株)	2	日本ヒューレットパッカー(株)	1
データ通信システム(株)	7	(株)ナカヨ通信機	8	(株)日本ビルサービス	1
(株)テレビ東京	1	西日本システム建設(株)	5	(財)日本品質保証機構	1
(株)電算	2	西日本旅客鉄道(株)	1	日本フィリップス(株)	5
(株)東亜エンジニアリング	3	日産自動車(株)	1	日本無線(株)	6
東海ソフト(株)	2	(株)ニスカ	1	日本モトローラ(株)	2
東海通信工業(株)	1	日信工業(株)	1	日本ユニシス(株)	1
(株)東急C A T V	1	日設エンジニアリング(株)	1	日本ラッド(株)	1
東京N T Tデータ通信システムズ(株)	2	(株)日通工	9	日本リパテック(株)	3
東京エレクトロニクスシステムズ	7	日鉄日立システムエンジニアリング	1	(株)ニューメディア総研	2
東京エレクトロン(株)	1	日東光学(株)	1	(株)ネオテクノ	2
東京コンピュータサービス(株)	1 0	日東光器(株)	1	(株)ネットイットワークス(株)	3
東京通信ネットワーク(株)	4	日本アンテナ(株)	1	(株)ネットワンシステムズ	2
東京電力(株)	7	日本衛星放送(株)	1	(株)パーテックススタンダード	5
東京都庁	3	日本インター(株)	1	バイオニア(株)	5

パナソニックエンジニアリング(株)	3	(株)富士通コンピュータテクノロジ	1	三岩商事(株)	4
(株)バルテック	2	富士通サポート&サービス(株)	3	(株) ミツバ	2
P F Uシステムズ(株)	1	富士通システムコンストラクション(株)	2	三菱電機(株)	1 2
東日本システム建設(株)	1	(株)富士通システムソリューション	3	三菱電機エンジニアリング(株)	1
東日本旅客鉄道(株)	3	(株)富士通ゼネラル	3	三菱電機システムサービス(株)	3
日立 I N S ソフトウェア(株)	1	(株)富士通ソーシャルサイエンス		三菱電機情報ネットワーク(株)	3
(株)日立アドバンスシステムズ	1	ラボラトリ	4	三菱電機特機システム(株)	3
日立 S K ソーシャルシステム(株)	2	富士通テクノシステム(株)	2	(株)村田製作所	3
日立京葉エンジニアリング(株)	1	富士通デバイス(株)	3	(株)メイテック	1 0
日立システムアンドサービス(株)	1	富士通ネットワークエンジニアリング	6	(株)モリテックス	1
日立湘南電子(株)	1	富士通 B S C (株)	2	矢崎総業(株)	4
(株)日立情報システムズ	2	富士通プログラム技研(株)	1	山一電機(株)	2
(株)日立製作所	9	(株) 富士通北陸システムズ	2	ヤマトシステム開発(株)	2
日立ソフトウェアエンジニアリング(株)	3	富士通北海道通信システム(株)	1	(株)ユニシアジェックス	1
日立通信システム(株)	1	(株) フジテレビジョン	1	ユニシステム(株)	2
日立デバイスエンジニアリング(株)	1	富士電機(株)	4	(株)ヨコオ	4
日立ビジネスソリューション(株)	3	F D K (富士電気化学)	1	リオン(株)	1
日立北海セミコンダクタ(株)	1	富士電機総設(株)	1	理化工業(株)	1
(株)ビッツ	2	(株) ブルヘッド	2	(株)リコー	3
日野システムズ(株)	5	松下システムソフト(株)	1	リコー精機(株)	1
(株)フォーバル	1	松下システムエンジニアリング(株)	5	(株)両毛システムズ	1
富士ソフト A B C (株)	5	松下通信 I T S エンジニアリング(株)	2	菱友計算(株)	1
富士通(株)	9	松下通信工業(株)	7	ローム(株)	1
富士通アインネットワークシステムズ(株)	1	(株)松下通信静岡研究所	1	ローム浜松(株)	1
富士通インターナショナルエンジニアリング(株)	3	松下電器産業(株)	3	ローランド(株)	1
富士通コミュニケーションシステムズ	2	松下電装システム(株)	1		
		マツダ(株)	1		

2.3.7 研究活動

本学科における研究活動を，所属する先生方が発表された論文，および，著書を掲げて示す．なお，ここでは，各先生方ごとに，代表的な論文 2 編，著書 3 編を掲載した．氏名の後の括弧内は，本学科在任期間を示す．

(1) 論文

鈴木八十二(1995～2001)

- 1) 鈴木八十二，“表示装置と光源システム”，照明学会誌，Vol.83, No.4, 1999-4, pp.235-241,
- 2) Manabu HIRATA, Yasoji SUZUKI, Masahiro YOSHIDA, Yutaka ARAYASHIKI, Mitsuo TERAMOTO, and Somsak CHOOMCHUAY, “ New Bias Voltage Generators for TFT-LCD 's Drivers ”; IEICE Transactions on Electronics (電子情報通信学会，英論文誌版) Vol. E83-C, No. 10, pp.1579-1582, Oct. 2000,

清水尚彦(1995～2001)

- 1) Naohiko Shimizu, Takehiko Watanabe, " High Performance Parallel FFT on Distributed Memory Parallel Computers ", Lecture Notes in Computer Science, Vol. 1336, p.317-326,1997
- 2) Naohiko Shimizu, Makoto Naito, " A Dual Issue Queued Pipelined Java Processor TRAJA, - Toward an Open Source Processor Project ", Proc. of AP-ASIC ' 99, pp.213-216, 1999

濱本和彦(1994～2001)

- 1) 成田裕, 濱本和彦: 「在宅画像診断のための超音波コーンビームによる3D反射係数分布再構成法の基礎検討」, 電気学会論文誌C Vol.121-C, No.4, pp.775-781 (2001.4).
- 2) K.Hamamoto, H.Umemura, K.Hirata (ATR),J.Yamada and K.Shinjo: " Applying the Hamiltonian Algorithm to Optimize Joint Photographic Expert Group (JPEG) Quantization Tables for Medical Ultrasonic Echo Images ", Jpn. J. Appl. Phys., Part 1, Vol.38, No.5B, pp.3376-3379 (1999 May)

川崎繁男(1994～2001)

- 1) S. Kawasaki, Y. Kido and T. Takano, " Laminated Active Integrated Amplifier Antenna Arrays for a Space Solar Power Satellite ", IEEE Trans. Microwave Theory Tech., Vol.47, No.9, Sep. 1999, pp.1901-1909
- 2) S. Kawasaki, H. Shiomi and K. Matsugatani, " A Novel FET Including an Illumination-Intensity Parameter for Simulation of Optically Controlled Millimeter-Wave Oscillators ", IEEE Trans. Microwave Theory Tech. Vol.46, No.6, Jun.1998, pp. 820-828

犬島 喬(1994～2001)

- 1) T. Inushima et al.: Phase transformation in amorphous silicon under excimer laser annealing studied by Raman spectroscopy and mobility measurements, J. Applied Physics 79, pp.9064-9073 (1996).
- 2) Takashi Inushima: X-ray study of crystal structure and diffuse scattering spectra of ferroelectric SbSBr having pseudo-Jahn Teller Phase Transition, J. Phys. Chem. Solids Vol. 60, pp.587-598 (1999)

三上 修(1994～2001)

- 1) T. Uchida and O. Mikami: " Optical Surface Mount Technology ", IEICE Trans. on Electronics, Vol.E80-C, No.1, pp. 81-87, 1997
- 2) 三上 修, 内田禎二: 「光表面実装技術の展開」, 電子情報通信学会論文誌, Vol.J84-C, No.9, pp.715-726, 2001

田中公男(1994～2001)

- 1) 呉 曉華, 宮本 隆志, 田中 公男 「デジタルマルチプレクサへ適用する並列スクランブラの設計」, 東海大学紀要工学部, Vol.39, No.2, pp.19-25, 2000年3月
- 2) A.A.Aboudebra, K.Tanaka, T.Wakabayashi, S.Yamamoto and H.Wakana 「Signal fading in land-mobile satellite communication systems; Statistical characteristics of data measured in Japan using ETS-VI」, IEE Proceedings Microwaves Antennas and Propagation, Vol.146, No.5, pp.349-354, Oct.1999

熱田清明(1988～2001)

- 1) アタスイット, 熱田清明, 近藤正三: 「多重解像度表現された画像間の相互結合を用いた画像復元の実験的考察」, 電子情報通信学会誌 A, Vol.J83-A No.1、117-124, (2000)
- 2) マナス, 熱田清明, 近藤正三: 「ヒトの濃淡画像からの3次元形状推定に関する一つのモデル」, 電子情報通信学会論文誌 D - , Vol.J73-D- No.10, 1789 - 1791, (1990)

松浦武信(1979～2001)

- 1) 松浦武信, 篠崎寿夫: “回路網のインパルス応答と振幅周波数特性の複素近似について”, 電子通信学会論文誌(A), Vol. J64 - A, No. 11, pp. 924 - 931, 1981年11月
- 2) 松浦武信, 篠崎寿夫: “三つの特性の同時近似について”, 電子通信学会論文誌(A), Vol. J64 - A, No. 7, pp. 519 - 526, 1981年7月

吉田 正廣(1978～2001)

- 1) 吉田正廣, 米山正雄: “状態図法による抵抗負荷型 D 2 CMOS (Dual Depletion CMOS) 連想メモリセルの直流解析、電子通信学会論文誌(C), Vol. 1 . J68-C, No.6. pp.447-453, 1985年6月.
- 2) Y. Suzuki, M. Hirata, Y. Yoshida, M. Teramoto, Y. Arayashiki, S. Choomchuy: “New Bias Voltage Generators for TFT-LCD’s Drivers”, IEICE Trans., Electronics, Vol.E83-C, No.10, pp.1579-1583, Oct. 2000.

鈴木健文(1975～2001)

- 1) 鈴木健文, 篠崎寿夫, “可変回路の設計”, 電子通信学会論文誌, Trans. IECE ' 77/8 Vol.60-A No.8, pp.685-692, 8月, 1977年
- 2) 鈴木健文, “分布集積回路の一近似法”, 電子通信学会論文誌 Trans. IECE ' 80/4 Vol.J63-A No.4, pp.284-285, 4月, 1980年

近藤正三(1974～2001)

- 1) アタスイット, 熱田清明, 近藤正三: 「多重解像度表現された画像間の相互結合を用いた画像復元の実験的考察」, 電子情報通信学会誌 A, Vol.J83-A No.1、117-124、(2000)
- 2) マナス, 熱田清明, 近藤正三: 「ヒトの濃淡画像からの3次元形状推定に関する一つのモデル」, 電子情報通信学会論文誌 D - , Vol.J73-D- No.10, 1789 - 1791, (1990)

小塚洋司(1974～2001)

- 1) Y. Kotsuka, E. Hankui, and Y. Shigematsu: “Development of Ferrite Core Applicator System for Deep-Induction Hyperthermia,” IEEE Trans. Microwave Theory, Tech, vol. 44, no10, pp1803-1810, Oct. 1996
- 2) Y. Kotsuka, K. Orii, H. Kojima, and K. Kamogawa: “New Wireless Thermometer for RF and Microwave Thermal Therapy using an MMIC in an Si VCO Type,” IEEE Trans. Microwave Theory, Tech, vol.47, no.12, pp.2630-2635, Dec. 1999

三木容彦(1970-1990)

米山正雄, 三木容彦: 「可変OR - AND回路を用いた演算回路」, 電子通信学会誌 D, Vol.55-D-6, (Jun.1972)

三木容彦: 「正負の重みを有するしきい値論理回路」, 電子通信学会誌 D, Vol.56-D-1(Jan.1973)

若林敏雄(1970 ~ 2001)

1) 小林, 若林「楕円スロットによるマイクロストリップ線路の結合特性」電子通信学会論文誌C, J 83-C, No.12, Dec. 2000.

2) S.Kosulvit, M.Krairiksh, C. Phongcharoenpanich and T.Wakabayashi: "A Simple and Cost-Effective Bidirectional Antenna Using a Probe Excited Circular Ring: IEICE Trans.ELECTRON., Vol. E-84-C, April 2001

富山薫順(1968 ~ 2001)

1) 富山薫順, 武部 幹: "フーリエ級数法を用いた帯域形減衰特性の一近似法," 電子情報通信学会論文誌A, Vol.J70-A, No.10, pp.1406-1411, Oct.1987

2) 山口康浩, 富山薫順, 武部 幹: "デジタル伝達関数による帯域形振幅および遅延特性の一近似法," 電子情報通信学会論文誌A, Vol.J72-A, No.5, pp.752-759, May 1989

町田東一(1968 ~ 2001)

1) 町田東一, 篠崎寿夫, 谷村 功: 「回路網の開放一短絡解析法とその素子偏差解析への応用」, 電子通信学会論文誌 A, 1968年5月

2) 張 巖, 町田東一: 「状態方程式表現による結合適応フィルタの性質について」, 電子情報通信学会論文誌 A, 1991年1月

森屋俣昌(1967 ~ 2001)

1) 森屋俣昌, 桜田弘人, 若井 登 "Lバンド衛星電波のスパイク状シンチレーションと電離圏スプラディックE層の関係", 電子情報通信学会論文誌, B- Vol. J75 - B - No.5 pp. 300 - 308, 1992年5月

2) 川口洋人, ナロン ヘマコン, 森屋俣昌, "赤道地域におけるCバンド衛星電波の低仰角伝搬特性", 映像情報メディア学会誌, Vol.51, No.1, pp.129 - 132 1997年1月

川副 護(1967 ~ 2001)

1) 川副 護, 馬場 久紀, 浅田 敏: 「地震に関連して観測されるVLF帯電磁放射の基礎的研究 - 観測される電磁波と地震発生予測の試み - 」東海大学紀要海洋学部 第48号, p109 ~ 129, 1999

2) Toshi Asada, Hisatoshi Baba, Mamoru Kawazoe, and Masahisa Sugiura: 「An attempt to delineate very low frequency electromagnetic signals associated with earthquakes」 Earth Planets Space, 53, p55 ~ 62, 2001

白石 正(1966～2001)

- 1) Tadashi SHIRAISHI : “ High Speed Transient Current in Chalcogenide Amorphous Semiconductors ”, Journal of Non-Cryst.Solids 46(1981)269-276
- 2) Tadashi SHIRAISHI : “ Isomerization Model for Photo-induced Effects IN a-SiH Journal of Non-Cryst ”.Solids 68(1984)167-174

須藤司朗(1966～2001)

- 1) 須藤, 寺本, “ 均一RC線路を用いた能動低域通過フィルタ ” 東海大学紀要工学部, Vol.32, NO.2,1992
- 2) 須藤, 寺本, 鈴木, 他 “ 均一RC線路を用いたノッチ周波数可調整形能動フィルタ ” 東海大学紀要工学部, Vol.38, NO.2,1998

小島紀男(1965～2001)

- 1) 小島紀男, 町田東一, 篠崎寿夫 : 「 回路網の時間域合成の一方法 」 電子通信学会 (D), Vol.62-D, No.12、 827～834頁 (1979年)
- 2) 富山薫順, 小島紀男, 松浦武信, 篠崎寿夫 : 「 多入力多出力システムの状態方程式近似に関する一方法 », 電子通信学会 (A), Vol.J64-A, No.11, 1052～1059頁 (1984年)

松尾守之(1965～2001)

- 1) 松尾守之, 松浦武信, 町田東一, 篠崎寿夫 : 「 2次元線形システム関数を用いた数値処理とその画像処理への応用 », 電子情報通信学会論文誌D, Vol.62-D, No.7, pp.491-498(1979)
- 2) 松尾守之, 近藤正三 : 「 一般ラプラシアンを用いたデジタル画像処理の復元理論 逐次消去法 », 電子情報通信学会論文誌A, Vol.J66-A, No.8, pp.656-498662(1983)

遠藤靖典(1997～2001)

- 1) Yasunori Endo and et., : “ Modelling and Fluctuation Analysis of Fuzzy Control Systems by Fuzzy Mapping Concept ”, Computational Intelligence for Modelling, Control and Automation, Evolutionary Computation and Fuzzy Logic for Intelligent Control, Knowledge Acquisition and Information Retrieval, IOS Press, Ohmsha (1999.2)
- 2) Kazuo Horiuchi and Yasunori Endo : “ Fluctuation Analysis of Information-Transfer Systems with Feedback Confirmation Channel by Means of Fuzzy-Set-Valued Mapping Concept ”, IEICE Trans. Fundamentals, Vol.E84-A, No.4, (2001.4)

篠崎寿夫(1961～1997)

- 1) 町田東一, 篠崎寿夫, 谷村 功 : 「 回路網の開放一短絡解析法とその素子偏差解析への応用 », 電子通信学会論文誌 A, 1968年5月
- 2) 鈴木健文, 篠崎寿夫, “ 可変回路の設計 ”, 電子通信学会論文誌, Trans. IECE ' 77/8 Vol.60-A No.8, pp.685-692, 8月, 1977年

三原義男(1961～1997)

- 1) 三原義男：「等方性プラズマの境界面における回折現象」, 電子情報通信学会論文誌 B, Vol.J52-B,No.3, (1963)
- 2) 若林敏雄、三原義男：「誘電体テープ線路の基本モードにおける特性」, 電子情報通信学会論文誌B, Vol.J64-B,No5, (1981)

米山正雄 (1969-1980)

- 1) 三木容彦、米山正雄：“交互相補形多重しきい論理回路とその応用”, 電子通信学会論文誌 (D), Vol. J62-D,No.8(1979)
- 2) 吉田正廣, 米山正雄：“E - D形CMOS連想メモリセルの記憶特性”, 電子通信学会論文誌 (C), Vol. J-68-C,No.9(1985)

寺本三雄(1959～1999)

- 1) 寺本三雄 “インピ - ダンス変換器を用いた伝送回路” 電子通信学会論文誌(A), 55-A, Vol. 10、(1980)
- 2) プラキット・タンゲテサノン, 須藤司朗, 寺本三雄, 鈴木八十二, カノックヤンチトラポンベ, “均一分布RC線路を用いたノッチ周波数可調整形能動フィルタ”, 東海大学紀要工学部, Vol. 38, No. 2、pp. 67-72, (1998)

佐藤達男(1956-1993)

- 1) 佐藤達男：「計算機用半導体スイッチの試作及び研究」, 東海大学紀要工学部1961-No.1(Apr.1959)
- 2) 佐藤達男：「線形グラフを用いた不完全順序機械の最小化の一方法」, 電子通信学会誌 D、Vol.B-59-5.1(May.1975)

(2) 著書・訳書

鈴木八十二(1995～2001)

- 1) 鈴木八十二：「液晶ディスプレイ工学入門」, 日刊工業新聞社, 1998年11月20日
- 2) 鈴木八十二：「超LSI工学入門」, 日刊工業新聞社, 2000年12月14日
- 3) 鈴木八十二, 吉田正廣：「パルス・デジタル回路入門」, 日刊工業新聞社, 2001年7月26日

川崎繁男(1994～2001)

- 1) 川崎繁男 他：「ミリ波技術の基礎と応用 - ミリ波技術の基礎と応用」編集委員会編, (株)リアライズ社, Jul. 1998年
- 2) 川崎繁男, 中谷彰文, 「マイクロ波平面回路のCAD設計I-受動回路」, (株)リアライズ社, Jul. 1996年
- 3) 橋本修, 川崎繁男, 「新しい電波工学」, 培風館, Oct. 1998年

三上 修先生(1994～2001)

- 1) 池上徹彦監修, 土屋治彦, 三上 修編著: 「半導体フォトニクス工学」, コロナ社, 1995年1月
- 2) 藤本正友, 三上 修共著: 「光機能素子」, 産業図書, 1995年7月

田中公男(1994～2001)

- 1) 武部 幹, 田中 公男, 橋本 秀雄: 「情報伝送工学」, オーム社, 1997年

松浦武信(1979～2001)

- 1) 篠崎寿夫, 松森徳衛, 松浦武信: 「現代工学のためのデルタ関数入門」, 現代工学社, 1983年1月
- 2) 篠崎寿夫, 松浦武信: 「工学者のためのルベグ積分と関数空間入門」, 現代工学社, 1991年2月
- 3) 松浦武信, 高橋宣明, 吉田正廣: 「物理・工学のためのルベグ積分入門」, 東海大学出版会, 1993年5月

吉田正廣(1978～2001)

- 1) 吉田正廣, 篠崎寿夫, 富山薫順, 小島紀男: 「フーリエ変換の計算法」, 現代工学社, 1994年1月
- 2) 松浦武信, 吉田正廣, 小泉義晴: 「物理・工学のためのグリーン関数入門」, 東海大学出版会, 2000年11月
- 3) 鈴木八十二, 吉田正廣: 「パルス・デジタル回路入門」, 日刊工業新聞社, 2001年7月

鈴木健文(1975～2001)

- 1) 鈴木 他: 「伝送回路網入門演習」, 東海大学出版会, 4月, 1971年
- 2) 鈴木 他: 「エレクトロニクスのための電気回路の基礎」, 東海大学出版, 1974年11月
- 3) 鈴木 他: 「電子回路」, 東海大学出版会, 1976年, 9月

小塚洋司(1974～2001)

- 1) 小塚洋司: 「光・電波解析の基礎」, コロナ社 (1995年)
- 2) 電気学会計測技術委員会編 (小塚委員長) 「電磁界の生体効果と計測」, コロナ社, 1995年
- 3) 小塚洋司: 「電気磁気学 その物理像と詳論」, 森北出版, 1998年

若林敏雄(1970～2001)

- 1) 篠崎, 若林, 木村: 「工学のための偏微分方程式とグリーン関数」, 現代工学社, 1987年
- 2) 佐藤, 若林: 「振動・電磁波入門」, 産業図書, 1995年
- 3) 若林, 高橋, 松浦: 「物理工学のための複素積分(応用偏)」, 東海大学出版会, 1996年

富山薫順(1968～2001)

- 1) 篠崎寿夫, 富山薫順編著: 「工学のための応用関数論」, 朝倉書店, 1978年
- 2) 篠崎寿夫, 富山薫順, 若林敏雄: 「現代工学のための応用フーリエ解析」, 現代工学社, 1983年
- 3) 松浦武信, 吉田正廣, 富山薫順: 「現代工学のための複素関数の微分と積分」, 現代工学社,

1998年

町田東一(1968～2001)

- 1) 町田東一, 篠崎寿夫: 「情報伝送工学演習」共著, 学献社, 1972年
- 2) 町田東一, 篠崎寿夫: 「対話演習電気回路の基礎」, コロナ社, 1977年
- 3) 町田東一: 「フーリエ変換とその応用」, 現代工学, 1994年

白石 正(1966～2001)

- 1) 白石 正: 「セメスターのための電子物性とデバイス」, 東海大学出版会 1998年
- 2) 白石 正: 「電子物性工学」, 東海大学出版会、1982年
- 3) D. Adler, 白石 正(訳): 「MITの量子物理学入門」, 現代工学社, 1984年

小島紀男(1965～2001)

- 1) 小島紀男: 「ブール代数と組合せ回路」, 現代工学社, 1997年
- 2) 小島紀男: 「集積順序回路」, 現代工学社, 1997年
- 3) 小島紀男, 篠崎寿夫: 「z変換入門」, 東海大学出版会, 1981年

松尾守之(1961～2001)

- 1) 松尾守之, 新保利和: 「電子計算機概論」, 森北出版, 1987年
- 2) 松尾守之, 大内 進: 「コンピュータ・ソフトウェア入門」, 森北出版, 1993年
- 3) 松尾守之, 稲富和夫, 新保利和: 「教養の情報科学」, 朝倉書店, 1994年

遠藤靖典(1997～2001)

- 1) Yasunori Endo :Modeling and Fluctuation Analysis of Fuzzy Control Systems with Fuzzy Mapping Equations ' ', Masoud Mohammadian (Editor)
New Frontiers in Computational Intelligence and its Applications, IOS Press, Ohmsha (2000)
- 2) 遠藤 靖典 :情報通信ネットワーク, コロナ社, 2001年1月26日

篠崎寿夫(1963-1994)

- 1) 篠崎寿夫, 若林敏雄, 木村正雄: 「工学者のための偏微分方程式とグリーン関数」,
現代工学社, 1987年
- 2) 篠崎寿夫, 松浦武信: 「工学者のためのルベーグ積分と関数空間入門」, 現代工学社, 1991年
- 3) 篠崎寿夫・武部幹: 「過渡現象と波形解析」, 東海大学出版会, 1965年

三原義男(1961～2001)

- 1) 清水俊之, 三原義男: 「マイクロ波工学」, 東海大学出版会, 1967年
- 2) 三原義男監修: 「電気磁気学」, 東海大学出版会, 1976年
- 3) 堀内和夫編著, 三原義男他: 「応用数理への道」, コロナ社, 1989年

米山正雄(1969-1980)

- 1) 米山正雄：「電子回路」，コロナ社，1960年6月25日
- 2) 米山正雄：「パルス回路」，朝倉書店，1965年2月20日
- 3) 米山正雄：「電子計算機の回路」，東海大学出版会，1975年1月24日

寺本三雄(1960-1995)

- 1) 武部 幹，篠 壽夫，寺本三雄 共著：「応用回路網学」，朝倉書店，1973年5月25日
- 2) 篠崎，寺本，松元 共編：「電子回路学の基礎」現代工学社，1985年

木村 登(1960-2000)

木村 登 他編著：「電子・情報・通信工学ガイド」，東海大学出版会，1987年

佐藤達男(1957-1993)

- 1) 佐藤達男：「自動制御」，電気学会，1963年5月
- 2) 佐藤達男：「電子計算機」，オーム社，1963年5月
- 3) 佐藤達男：「電子計算機のプログラミング」，電気学会，1970年10月

2.3.8 同窓会活動と卒業生の動向

本学科の同窓会組織としては「東海大学通信工学会」が結成されており，湘南校舎工学部通信工学科と代々木校舎の第二工学部通信専攻の卒業生を主たる会員にして構成されている．本節では，同窓会の活動のようすと，卒業生のうち，学位を取得された方の氏名，それに，本学科で開講しているOB講座に講師を務めていただいた方の氏名を掲げる．

(1) 東海大学通信工学会の活動

昭和52(1977)年5月3日，本学科の同窓会組織として「通信工学会」が結成された．東京霞が関ビル33階の本学校友会館で行われた結成祝賀会には，本学の創立者で総長の松前重義先生，その右腕とも言われ学長の牧野不二夫先生，工学部長の森田定市先生，本学科主任教授の米山正雄先生他，多数のご来賓，本学科卒業生164名が出席された．初代の会長に松尾守之氏(昭和35年度卒・通信工学科助教授)が就任した．発足当時の会員数は4300人であった．

昭和54(1979)年7月10日には，会報「波濤」の創刊号を発行した．以後，「波濤」は定期的に発行され，卒業生と本学科を結び広報紙として，重要な役割をはたしてきた．

発会当初の役員は以下の通りであった．

- | | |
|-------|---------------------|
| 名誉会長 | 松前重義(東海大学総長) |
| 名誉副会長 | 松前達郎(東海大学副理事長) |
| 名誉副会長 | 篠原 登(東海大学理事) |
| 名誉副会長 | 高木敏之(松下通信工業(株)開発部長) |
| 顧問 | 米山正雄(通信工学科主任教授) |
| 顧問 | 木村 登(通信工学科副主任教授) |

顧問	篠崎壽夫（通信工学科教授）
会長	松尾守之（昭和35年度卒）
副会長	吉村雅雄（昭和34年度卒）
副会長	新井正彦（昭和37年度卒）
事務局長	柴崎 洋（昭和41年度卒）
書記	小川忠男（昭和43年度卒）
書記	鈴木健文（昭和44年度卒）
会計	富山薫順（昭和40年度卒）
会計	小林一雄（昭和46年度卒）
監査	町田東一（昭和37年度卒）
監査	宮川俊夫（昭和45年度卒）

通信工学会の活動は、学科の学生への支援として、通信工学会賞を設け成績の優秀な学生には「優秀賞」を、卒業研究で顕著な業績を上げた学生には「努力賞」を授与し後輩の勉学の励みとした。その他に卒業パーティの援助も行っている。

通信工学会の総会は3年に一度開かれ、年々参加する会員が増加してきた。それに伴って、会の運営を強化することとなり、役員の変更を行い、会長に、坂本 巖氏（昭和35年度卒・東京放送(TBS)技術局担当部長）が就任し、初代会長の松尾守之氏は事務局長となって、学内にあって富山薫順会計担当と財務運営の健全なる運営と資金面の調達、名簿の整備、会報の発行業務など、会を発展させていく上での縁の下の役割を担う事になった。現在では会員数1万1千名に達し、多くの卒業生が情報通信産業をはじめ、あらゆる分野で活躍しており、さらなる発展が期待される。

(2) 学位取得者

本学科を卒業して本学大学院工学研究科から学位を取得した卒業生は以下の通りである。

氏名	工学部卒業年度	学位記番号	学位取得年月	主な指導教授
塩見 英久	平成 年度卒	甲第404号	1999.03.25	川崎繁男
熱田 清明	昭和53年度卒	甲第 96号	1988.03.25	近藤正三
吉田 正廣	昭和50年度卒	乙第134号	1990.09.19	米山正雄
松浦 武信	昭和45年度卒	甲第 37号	1983.09.16	篠崎壽夫
本間 光一	昭和45年度卒	乙第133号	1990.09.19	町田東一 / 篠崎壽夫
鈴木 和夫	昭和45年度卒	甲第 5号	1980.03.25	東野庄司
鈴木 健文	昭和44年度卒	甲第 20号	1981.10.13	篠崎壽夫
若林 敏雄	昭和42年度卒	乙第 39号	1986.03.25	三原義男
鈴木八十二	昭和41年度卒	乙第 13号	1982.03.04	寺本三雄
加藤 恭子	昭和40年度卒	乙第152号	1991.09.19	武部 幹
富山 薫順	昭和40年度卒	乙第 76号	1988.09.19	篠崎壽夫
白石 正	昭和39年度卒	乙第 4号	1979.03.12	飯田昌盛

氏名	工学部卒業年度	学位記番号	学位取得年月	主な指導教授
小島 紀男	昭和37年度卒	乙第 27号	1984.09.19	篠崎壽夫
町田 東一	昭和37年度卒	甲第 1号	1969.10.23	篠崎壽夫
駒崎 友和	昭和36年度卒	乙第220号	1994.03.25	町田東一 / 篠崎壽夫
松尾 守之	昭和35年度卒	乙第 38号	1986.03.25	篠崎壽夫
森屋 俣昌	昭和33年度卒	乙第208号	1993.09.17	

(3) 外国人で学位を取得した者

留学生で本学大学院工学研究科電気専攻(通信)から学位を取得した者は以下の通りである。

氏名	(国籍)	学位記番号	学位取得年月	主な指導教授
ウイワット・キラノン	(タイ)	甲第 33号	1982.06.15	町田東一 / 篠崎壽夫
ブーンワット・アッタチュウ	(タイ)	甲第 76号	1986.09.19	近藤正三
カノック・ジャンナボーンソット	(タイ)	甲第 80号	1986.09.19	
マナス・サンワラシン	(タイ)	乙第141号	1991.03.25	近藤正三
張 巖	(中国)	甲第159号	1991.09.19	町田東一 / 篠崎壽夫
カンシット・マイトリー	(タイ)	乙第239号	1995.03.25	近藤正三
タウイン・ブンマ	(タイ)	乙第259号	1995.09.19	森屋俣昌
スラパン・イアパイブーン	(タイ)	甲第303号	1997.03.25	近藤正三
ヤン・リヤント	(タイ)	甲第405号	2000.03.24	近藤正三
アタッシット・ラサクル	(タイ)	甲第408号	2000.09.25	近藤正三

(4) OBによる講座：「電子情報通信技術文明論」(土曜日 4限)と講義担当者

昭和の終り頃から大学改革の叫び声が大きくなりはじめたが、情報通信分野での技術の著しい変化を察知した本学科ではカリキュラムの改訂作業に入り、平成2年度生から新カリキュラムによる教育をはじめた。その最も顕著なものが、2年次後期に開講した「電子情報通信技術文明論」である。この科目は2単位の専門選択科目であり、土曜日の4時限に開講したが盛況である。

「文明論」と銘打ったことにより、すでに本学の特徴となっている「現代文明論」との関連を想像される方も多いと思われる。確かに、この講座を担当する講師とテーマは「現代文明論」と同じように毎週交替するのであるが、「現代文明論」と最も異なる点は、講師陣を、現在、情報通信産業界の技術者として第一線で活躍している卒業生、それも通信工学科を卒業したOBに限定しているところである。

大学には各種の資源がある。教授やスペシャリストといった頭脳資源もその一つである。その他にも土地や建物といった経済的に評価できる資源もあれば、実習設備といった資源もある。文献、図書、論文といった知的所有権となる資源もある。そしてさらに付け加えれば、卒業生という人脈的資源もあることを忘れてはならない。

通信工学科が発足したのは昭和31(1956)年であった。それ以来45年の歳月が経過したが、その間に卒業したOBは代々木の第二工学部通信専攻を含めて1万人を越えた。この世代構成は60代が

250人、50代が2750人、40代と30代がそれぞれ3千人ずつ、20代が1800人となっている。最年長者は現在64、5才である。大部分が社会の第一線で活躍しており、大学にとっては貴重な人脈的資源を形成している。

大学の持つこの大きな資源を活用しない手はない。通信工学科ではここに目をつけ、新カリキュラムの目玉である「電子情報通信技術文明論」の講義を通信工学科のOBに担当して頂くことにしたのである。1990年度から2000年度までに講義担当として協力していただいた方は、延べ210人である。

OBによる講座は図らずも通信工学科における大学改革の目玉として、ますます脚光を浴びることになる。それは、この講座の存在を知って他学科の学生が潜り込んで聴講に来ていることから分る。彼らにとっては、この講座の単位認定はないので履修上のメリットはないが、それを承知の上で聴きに来ているのである。

授業を担当していただいたOBの方々のお名前と所属、講義題目を下記に記す。なお、所属は講義を御願ひした当時のものである。

- ◆ 根岸一郎（昭和54年度卒・日本ビクター(株) I L A センタ 商品技術部 開発部）
テーマ：「プロジェクターの開発について」
- ◆ 小林右治（昭和51年度卒・ソニー(株)厚木テクノロジーセンターA/V製作三部第一課課長）
テーマ：「デジタル放送機器の開発」
- ◆ 山路基洋（昭和51年度卒・中央電子(株)名古屋テクノロジーセンタ長）
テーマ：「システム開発について」
- ◆ 橋口長和（昭和49年度卒・(株)協和エクシオ研究開発センタ研究開発第一グループ課長）
テーマ：「建設側から見た通信事業」
- ◆ 井手和夫（昭和48年度卒・気象庁気象衛星センターデータ処理部管制課課長）
テーマ：「情報通信としてみた気象業務」
- ◆ 柳瀬優二（昭和45年度卒・日本電気ソフトウェア(株)応用ソフトウェア開発部長）
テーマ：「ソフト産業の歴史」
- ◆ 本間光一（昭和45年度卒・松下通信工業(株)）
テーマ：「デジタル移動通信」
- ◆ 仲倉昭夫（昭和45年度卒・カシオ計算機(株)研究開発本部設計システム開発部室長）
テーマ：「商品開発の推移と設計システムの発展」
- ◆ 植木喜治（昭和44年度卒・(株)パイオニア・カーエレクトロニクス事業本部技術部長）
テーマ：「衛星を用いたナビゲーションシステム」
- ◆ 室本 淳（昭和43年度卒・日本電気(株)無線事情本部・マイクロ波衛星通信システム本部エキゼキューテブエキスパート）
テーマ：「マイクロ波通信システムの開発について」
- ◆ 和田益雄（昭和42年度卒・東芝小向工場映像技術部主幹）
テーマ：「放送におけるデジタル技術」

- 門永 弘 (昭和42年度卒・㈱リコーシステムユニット事業部N - PC事業グループリーダー)
テーマ:「ノートブックパソコンの動向」
- 澤田茂洋 (昭和42年度卒・㈱NTT - TE マーケティング本部担当部長)
テーマ:「電気通信・情報通信の進展について」
- 郡司勝彦 (昭和42年度卒・沖電気工業㈱移動通信システム技術第一部部長)
テーマ:「パーソナルコミュニケーション」
- 龍川 稔 (昭和42年度卒・日本IBM㈱製品企画推進部次長)
テーマ:「コンピュータによる生産統合システム」
- 高橋史郎 (昭和41年度卒・㈱東芝エレクトロデザインセンター部長)
テーマ:「放送用カラーカメラの設計について」
- 鈴木八十二 (昭和41年度卒・㈱東芝・電子事業本部液晶担当副技師長・工博)
テーマ:「集積回路技術の動向と液晶ディスプレイ技術」
- 植田知雄 (昭和40年度卒・日本プレジジョン㈱開発室開発室長)
テーマ:「企業における技術開発」
- 志村孚城 (昭和39年度卒・㈱富士通・医療機器研究部部長)
テーマ:「ME研究の最前線からのメッセージ」
- 中尾敏勝 (昭和39年度卒・日本電気ホームエレクトロニクス㈱情報システム販売本部長)
テーマ:「コンピュータの交換機の連動技術について」
- 柳沼悌司 (昭和39年度卒・㈱富士通・システム本部首席部長)
テーマ:「コンピュータによる新聞製作」
- 柿崎茂康 (昭和37年度卒・神田通信工業㈱産業機器営業部担当部長)
テーマ:「電話機の品質保証」
- 丸山正昭 (昭和37年度卒・東京放送㈱ (TBS) 技術局VTR・CG部部長)
テーマ:「放送技術概論」
- 澤田 徹 (昭和37年度卒・富士通カスタム㈱取締役中部本部長)
テーマ:「コンピュータトラブルの情報化社会への影響」
- 布施 明 (昭和36年度卒・三菱電気㈱情報開発試作部長)
テーマ:「九〇年代のコンピュータハードウェアの技術動向」
- 前川昌道 (昭和35年度卒・国際電信電話㈱KDD営業本部審議役、元ニューヨーク支社長)
テーマ:「国際通信サービスの現状と利用例」
- 坂本 巖 (昭和35年度卒・東京放送㈱ (TBS) 技術計画局専任部長)
テーマ:「国内通信衛星の放送での利用」

2.3.9 国際活動

本学科の国際活動について、先生方が国際会議で発表された論文（各自3編以内）、海外での研究経験（滞在記録）、国際会議の組織・運営の記録、そして、本学科として永年取り組んできた代表的な国際協力である、タイ王国モンクット王工科大学ラカバン校への学術支援の記録について述べる。

なお、氏名の後の括弧内は、本学科に在任した期間を示す。

(1) 国際会議での発表

鈴木八十二(1995～2001)

- 1) Yasoji SUZUKI and Hitoshi HATOH, " Technology Trend of Material and Parts for LCD "; Proceedings of the Fourth International Display Workshops (IDW ' 97), ITE (旧テレビジョン学会) and SID, in Nagoya, JAPAN, FMC2-1, Invited Paper, pp.339-342, Nov. 19-21, 1997,
- 2) M. HIRATA, Y. SUZUKI, M. YOSHIDA, Y. ARAYASHIKI, N. SUMIYOSHI and A. THANACHAYANONT, " NEW PLUS- AND MINUS-VOLTAGE GENERATORS FOR TFT-LCD PANELS "; Proceedings of the Second IEEE Asia Pacific Conference on ASICs (AP-ASIC 2000), Session 1.5, in Cheju, KOREA, IEEE, IEEK, KIEE, KISS, pp.17-20, Aug. 28-30, 2000,
- 3) A. Arayashiki, Y. Suzuki, M. Yoshida, M. Hirata, T. Yamamoto and A. Thanachayanont, " VOLTAGE DOWN CONVERTER (VDC) WITH LOW CONSUMING CURRENT FOR LARGE DRIVING OUTPUT CURRENT "; 2000 IEEE International Symposium on Intelligent Signal Processing and Communication Systems (ISPACS 2000), Vol. 2, F7-2-5, in Honolulu, Hawaii, ITA, IEICE and IEEE, pp.687-690, Nov. 5-8, 2000,

清水尚彦(1995～2001)

- 1) N.Shimizu,K.Miyasaka,H.Haramiishi, "Design of A Memory Latency Tolerant Processor(SCALT)", Workshop on Memory Decoupled Architectures, PACT'01, Barcelona, Spain, 2001
- 2) N.Shimizu, "Multi-Granularity Page Size Support for Linux and the Performance Evaluation", International Software Engineering Symposium 2001, Wuhan, China, 2001
- 3) N.Shimizu, D.Mitake, "Processor Architecture and Evaluation for the Long Deviated Memory Latency", 3rd Workshop on Advanced Parallel Processing Technologies, Changsha, China, 1999

濱本和彦(1994～2001)

- 1) K.Hamamoto (Tokai University) T.Shiina (University of Tsukuba) T.Nishimura (Oita University)"Study on Filtered Maximum Entropy Image Restoration of Limited Angle Diffraction Tomography"17th Annual International Conference IEEE Engineering in Medicine and Biology Society, Montreal, Canada (1995.9)

- 2) K.Hamamoto (Tokai University) T.Nishimura (Oita University)"The Use of the Wavelet Transform for Improvement of Axial Resolution of Pulse-Echo Ultrasonic Images"The 22nd Annual International Conference on Industrial Electronics, Control, and Instrumentation, Taipei, Taiwan (1996.8)Proceedings of the 1996 IEEE IECON, vol.1 of 3, pp.536-539
- 3) K.Hamamoto (Tokai University) : " Standardization of JPEG Quantization Table for Medical Ultrasonic Echo Images "; The 6th IEEE International Conference on Electronics, Circuits and Systems, Pafos, Cyprus (1999.9),Proceedings vol.II, pp.683-686

川崎繁男(1994 ~ 2001)

- 1) S. Kawasaki, Y. Kido, H. Hayakawa, K. Iwasaki and H. Urabe, "Laminated Active Integrated Antenna Arrays Composed of Functional Layers for Microwave Wireless Power Transmission in Space", ISAP2000, Fukuoka, Japan, Aug. 2000, pp.705-708
- 2) . Adachi, J. Kobayashi, S. Kawasaki, H. Urabe and K. Iwasaki, "Millimeter-Wave Harmonic Space Diversity Active Integrated Antenna with Microwave Injection Locking", 2000 Asia-Pacific Microwave Conf, Sydney, Vol. 1,Dec. 2000, pp.1506-1509
- 3) H. Shiomi, S. Kawasaki, "Characteristics of Optically Controlled Oscillator using InP HEMT with Novel Structure", 1999 IEEE MTT-S International Microwave Symposium Digest, Apr. 1999, pp.1805-1808

三上 修(1994 ~ 2001)

- 1) Takashi Satoh, Akira Ichimura, Osamu Mikami, Satoru Tomaru, Makoto Hikita and Teiji Uchida : "Coupling of Spot-size Converted Laser Diode to Polymeric Waveguide with 45-degree Micro Reflection Mirror for Optical Surface Mount Technology",Proc. of 1998 IEMT/IMC Symposium, pp.114-117, Omiya, April , 1998.
- 2) Hiroyuki Uno, Akiyoshi Kojima, Atsushi Shibano and Osamu Mikami : "Optical Wavelength Switch using Strain-controlled Fiber Bragg Gratings",Proc. of SPIE, Vol. 3740, pp.274-277, 1999, Optical Engineering for Sensing and Nanotechnology (ICOSN`99) , Yokohama, June 16-18, 1999.
- 3) Osamu Mikami:"The Status and Future of Optical Packaging Technology", Proc. of 2000 IEMT/IMC Symposium pp.188-193, Tokyo, April 19-21, 2000

田中公男(1994 ~ 2001)

- 1) Khingthong Inthavongkham, Khamla Chanthavong, Phonekeo Chanthamaly, Somkot Mangnomek, Susumu Ikeda and Kimio Tanaka 「 Design of the Transmission Line Simulator having a Certain Bit Error Rate 」 , Proceedings 2000 Asia-Pacific Symposium on Broadcasting and Communications. pp.292-297, Dec.2000

熱田清明(1988 ~ 2001)

- 1) D.Endo,T.Hiyane,S.Kondo,K.Atsuta, "Fractal Image Compression by the Classification in the Wavelet Transform Domain", Proceedings of 1998 IEEE International Conference on Image Processing,MP08.12.1-5,10.1998
- 2) A.Lasakul,S.Hanai,S.Kondo,K.Atsuta, "Image Restoration Using 2-D Multiresolution Analysis", Proceedings of 12th European Conference on Circuit Theory and Design,821-824,8.1995
- 3) K.Atsuta,M.Sangworasil,S.Kondo, "A New Method of Estimating Shape from Shading by Using a Constraint at Zero-crossing of Image Brightness", Proceedings of The 9th International Conference on Pattern Recognition,666-668,11.1988

松浦武信(1979 ~ 2001)

- 1) T.Matsuura, S.Okamura : " On FIR Writer Identification Method ", ECCTD ' 95 Proceedings, vol.2, pp.1031-1034, Aug.1995
- 2) T.Matsuura, S.Yamamoto : " Signature Verification Using Distribution of Angular Direction of Penpoint Movement ", Proceedings of IWFHR - VI, pp.537-544 , Aug . 1998
- 3) T.Matsuura, T.Shinozaki : " A Method for Solving Stochastic Differential Equation with Random Coefficients ", Proceedings of ICECS2001 , vol . 2 , pp.601-604 , Sep . 2001

吉田正廣(1978 ~ 2001)

- 1) S. Saitoh, Y. Suzuki, M. Yoshida, M. Teramoto, Y. Saeki: " New CMOS Double Charge-Pumping Circuit for Back-Gate Bias Generator ", 1998 International Technical Conference on Circuits/Systems, Computers and Communications(ITC-CSCC '98), Vol.II, pp.1367-1370, July 1998.
- 2) M. Hirata, S. Choomchuay, Y. Suzuki, M. Yoshida, M. Teramoto, A. Yamaguti: " A High-Voltage Generator using CMOS Charge Pumps ", 1999 IEEE International Symposium on Intelligent Signal Processing and Communication Systems (ISPAS 1999), TMC-01, pp.41-44, Dec. 1999.
- 3) Y. Hamada, M. Yoshida, Y. Suzuki, K. Chikagoshi: " Content Addressable Memory with Hamming Distance Search ", 2000 IEEE International Symposium on Intelligent Signal Processing and Communication Systems (ISPAS 2000), Vol.1, C6-1-3, pp.188-191, Nov. 2000.

鈴木健文(1975 ~ 2001)

- 1) T.Suzuki and S.Tomiyama,"Extrapolation for Band-Pass Characteristics by Using Genetic Algorithm on DCT",AP-ASIC'99,IEEE SSCS/EDS,August,1999,Seoul,Korea.
- 2) T.Suzuki and S.Tomiyama,"Extrapolation for Compressed Coefficient's Band-Pass Delay Time Characteristics by Using Genetic Algorithm on the DCT",WCC-ICSP2000,CIE and IEEE SP,August,2000,Beijing,China.
- 3) T.Suzuki and S.Tomiyama,"Extrapolation for Band-Pass Delay Time Characteristics by Using Genetic Algorithm on DCT",ICECS'2K,The 7th IEEE International Conference on Electronics,Circuit and Systems,December,2000,Kaslik,Lebanon.

近藤正三(1974 ~ 2001)

- 1) D.Endo,T.Hiyane,S.Kondo,K.Atsuta, "Fractal Image Compression by the Classification in the Wavelet Transform Domain", Proceedings of 1998 IEEE International Conference on Image Processing,MP08.12.1-5,10.1998
- 2) A.Lasakul,S.Hanai,S.Kondo,K.Atsuta, "Image Restoration Using 2-D Multiresolution Analysis", Proceedings of 12th European Conference on Circuit Theory and Design,821-824,8.1995
- 2) K.Atsuta,M.Sangworasil,S.Kondo, "A New Method of Estimating Shape from Shading by Using a Constraint at Zero-crossing of Image Brightness", Proceedings of The 9th International Conference on Pattern Recognition,666-668,11.1988

小塚洋司(1974 ~ 2001)

- 1) .Youji Kotsuka, "A Method of Controlling EM-field Distribution in Medical Treatment Room, ",General Assembly on International Union of Radio Science, URSI in Toronto,vol. 1, 870, Aug.1999 (Invited).
- 2) .Youji Kotsuka, "A Method of Effective Use of Ferrite for Microwave Absorber," IEEE MTT-S, Int. Microwave Symp. vol. 2, pp. 1187 ~ 1190, May 2001.
- 3) . Youji Kotsuka, "New Proposal of Micro-Thermal Therapy Using MMIC Oscillator,"Asia Pacific Radio Science Conference, AP-RASC, Aug. 2001 (Invited).

若林敏雄(1970 ~ 2001)

- 1) T. Wakabayashi and T.Itoh:Three-Dimensionally Coupled Microstrip Lines via a Rotated Slot in a Common Ground Plane: IEEE Int. Symp. MTT-S, June 1992
- 2) H. Kobayashi and T. Wakabayashi :Analysis of Coupled Microstrip Lines through a Composite Slot: 1998 Asia-Pacific Microwave Conference(APMC1998),Dec. 1998
- 3) T. Matsuda, T. Wakabayashi, K. Ogoshi and et.al:Effect for Cancer Cells due to Magnetic Field Irradiation: 2000 International Conference Hyperthermia Oncology, April 2000

白石 正(1969-2001)

- 1) Invited Isomerization effect in a-Si:H , The 3rd Japan-France Intelligent Symposium 28 Aug 2000
- 2) Invited Growth of AlN in nitrogen-ECR plasma , International Conference General Assembly and Fourth APAM Topical Seminar , 2 September 2000
- 3) Properties of InN, SnN and SbN films prepared by plasma-assisted CVD, The 8th International Symposium Plasma Chemistry, September 1987

富山薫順(1968 ~ 2001)

- 1) K.Negoto, S.Tomiyama and T.Takebe,"Computational Complexity Reduction in Multi-Processor Implementation of Recursive Digital Filters by Similarity Transformation," 38TH MIDWEST SYMPOSIUM ON CIRCUITS AND SYSTEMS,

The Federal University of Rio de Janeiro, The IEEE Circuits and Systems Society,
Rio de Janeiro, Brazil, Aug.1995.

2) T. Suzuki and S. Tomiyama , "Extrapolation for Band-pass Characteristics by Using Genetic Algorithm on the DCT," AP-ASIC'99, IEEE SSCS/EDS, Seoul, Korea.
August 23-25, 1999.

町田東一(1968 ~ 2001)

"A System Function Representation by Scale-shift Transform"2000年5月 , The 2000 IEEE ISCAS.

森屋倣昌(1967 ~ 2001)

1) MingsaiTsai, Yoshiaki Moriya and Eiji Shibuya "Bit - Error Ratio of PCM (Pulse Code Modulation) Sound Broadcasting by Communication Satellite and Propagation Characteristics",Proceedings of 1997 International Symposium on Radio Propagation, pp.478-481, August 1997

2) T.Paungma,E.Shibuya and Y.Moriya "Measurements of Carrier-to-Noise Ratio of Ku Band Satellite-Broadcast Reception", Proceeding of 1996 International Telecommunication Symposium,Taiwan,Vol.3, pp.71-78,1996

須藤司朗(1966 ~ 2001)

1) S. SUDO, M..TERAMOTO, Y.SUZUKI: Active LPF with The Transmission Zero Using Double Capacitive Layers Uniformly Distributed RC Line. ITC-CSCC'97, July 1997.

2) S.SUDO, M.TERAMOTO, Y.SUZUKI, P.TANGTISANON, K.JANCHITRAPONGVEG: Active Band Pass Filter With Notch Characteristics Circuit using Uniformly Distributed RC Line. ISPACS'99, December, 1999.

3) S.SUDO, M.TERAMOTO, P.TANGTISANON, K.JANCHITRAPONGVEG : Novel Active Low Pass Filter With Notch Characteristics Circuit using Distributed RC Line. APSBC2000. December, 2000.

小島紀男(1965 ~ 2001)

1) : ON A NUMERICAL SOLUTION OF AN INTEGRAL EQUATION AND ITS INVERSE PROBLEM ISCAS (University of Roma , IEEE (1982)

2) : ON A TIME DOMAIN SYNTHESIS METHOD FOR LINEAR NETWORKS , ISCAS (Japan) , IEEE (1979)

松尾守之(1965 ~ 2001)

1) Shozo KONDO & Moriyuki MATSUO: " A Theory of Design for Nnlinearfuntcons of Information Processing on Patterns ", Proceedings of 5th International Conferrece of Pattern Recongnition,pp.965-967,IEEE Computer Society, Miami beach, Florida U.S.A. December1-4 1980,

2) Moriyuki MATSUO & Shozo KONDO: " A Definition of a Measure of Picture sharpness by Using the Theory of Vector Field on a Picture Space and Its Application to Picture Restoration ", Proceedings of 6th International Conference of Pattern Recognition, pp.109-112, IEEE Computer Society, Munich, F.R.Germany, October 1982.

3) Moriyuki MATSUO: " Extracting Using Gray Level Gradient on the Defocused Image ", Proceeding of SPIE-The International Society for Optical Engineering Volume 974 Application of Digital Image Processing 4, 15-17 August 1988 San Diego, California U.S.A.

遠藤靖典(1997 ~ 2001)

1) Yasunori Endo and Kazuo Horiuchi : "On Clustering Algorithm for Fuzzy Data", Proc. 1997 International Symposium on Nonlinear Theory and Its Applications, pp.381--384 (1997.11).

2) Yasunori Endo : "Clustering Algorithm Using Covariance for Fuzzy Data", Proc. 1998 International Symposium on Nonlinear Theory and Its Applications, pp.511--514 (1998.9).

3) Yasunori Endo and Kazuo Horiuchi : "Modeling and Fluctuation Analysis of Fuzzy Control Systems with 3-Inputs and 1-Output FLC with Fuzzy Mapping Concept", Proc. 1999 International Symposium on Nonlinear Theory and Its Applications, pp.523--526 (1999.12).

三原義男(1961 ~ 1990)

1) Y.Mihara & K.Horiuchi: " Diffraction of Plane Waves by a Conducting Screen on the Boundary Plane of a Homogeneous Anisotropic Medium ", ICMCI-Tokyo.No.M23-5,(Apr.1954)

2) T.Wakabayashi, H.Osawa & Y.Mihara: " Studies on Electromagnetic Waves Absorption Characteristics of Layered Sphere Modes " The 3rd Japan-China Joint Meeting on Optical Fiber Science & Electromagnetic Theory, No.EMT-90-123,(Oct.1990)

3) T,Wakabayashi, H.Osawa & Y.Mihara "Studies on Electromagnetic Waves Absorption Characteristics of Layered Sphere Models" The 3rd Japan-China Joint Meeting on Optical Fiber Science & Electromagnetics, 1990

寺本三雄(1960 ~ 2000)

1) Prakrit Tangtisanon, Shiro Sudo, Mitsuo Teramoto, Yasoji Suzuki, Kanok Janchitrapongveg, " ACTIVE LPF USING UNIFORMLY DISTRIBUTED RC LINE ", The 1998 IEEE Asia-Pacific Conference on Circuits and Systems (APCCAS ' 98), IEEE & NECTEC, Chiangmai, Thailand, pp.283-286, Nov. 24-27, 1998,

2) Prakrit TANGTISANON, Shiro SUDO, Mitsuo TERAMOTO, Yasoji SUZUKI, Kanok JANCHITRAPONGVEG, " Active Band Pass Filter with Notch Characteristics Circuit using Uniformly Distributed RC Line ", 1999 IEEE International Symposium on Intelligent Signal Processing and Communication Systems (ISPACS ' 99), IEEE, IEICE, JICA, NECTEC & NSTDA, Phuket, Thailand, pp.359-362, Dec. 8-10, 1999,

3) Prakrit Tangtisanon, Wuthiporn Lerddasana, Jintana Nakasuwan, Kanok Janchitrapongveg, Shiro Sudo

and Mitsuo Teramoto, " Novel Active Low Pass Filter with Notch Circuit using Distributed RC Line ", ITE, KMITL, IEEE, TOKAI University, Tokyo Institute of Technology, NIME, JICA, KMITL, Thailand, pp.62-64, Dec. 21-23, 2000,

(2) 海外での研究・滞在記録

熱田清明

イリノイ大学Urbana-Champaign校 (アメリカ) 1996年5月1日 ~ 1997年3月15日
訪問研究員として滞在, C 計画にて

吉田正廣

U C L A (米国), 1994年8月 ~ 1995年3月, C 計画にて訪問研究員として滞在 .

松浦武信

エッセクス大学 (英国) 1988年4月から1989年4月まで客員教授として滞在 . 研究計画 C . 遣 .

小塚洋司

1995年4月 ~ 1996年3月までハーバード大学に客員教授として滞在 . 研究計画 C に基づく .

白石 正

マサチューセッツ工科大学 (MIT) (米国) 1980年7月 ~ 1981年3月までと1981年
7月 ~ 1981年9月まで客員研究員として滞在

近藤正三

フランス情報・制御国立研究所 (仏国) 1992年4月15日より93年3月15日までに訪問研究員して滞
在, サバチカルを利用して .

森屋倣昌

K M I T L (タイ王国) 1998年1月10日から99年3月10日まで, JICA長期専門家として滞在 .
J I C A の要請による派遣

若林敏雄

(1) UCLA (米国), 1991年4月 ~ 1992年3月, 訪問研究員として滞在.C計画による .

(2) KMITL (タイ王国), 1996年3月 ~ 1996年12月, JICA個別専門家として滞在.JICA要請による
東海大学の命令による派遣 .

松尾守之

1) ブダペスト工科大学 (ハンガリー) 1989年4月7日から1990年3月31日まで
客員教授として滞在 . サバチカルを利用して .

2) K M I T L (タイ王国) 1999年3月5日から2000年3月28日まで, JICA長期専門家として滞在 .
J I C A の要請による派遣

(3) 国際会議における組織・運営, 役員等の記録

鈴木八十二

- 1) Production Cost Saving (PCS) Forum-FPD-Phase 2 (部品・材料分科会報告), SEMIジャパン, 大
阪・インテックス大阪5号館, 1997年5月30日 (金) PCS運営委員 & 部品・材料分科会会長,
- 2) 光産業動向調査委員会 運営委員, & 光産業動向ディスプレイ調査専門委員会 委員長, 財

団法人 光産業技術振興協会，1998年7月14日，幕張メッセ，光産業動向セミナー，

川崎繁男

"Thailand-Japan Joint Symposium on Microwaves 1999 ; TJMW ' 99",

電子情報通信学会, Pattaya, Thailand, September 21-22, 1999, Secretary

小塚洋司

1). IEEE-IMS, マイクロ波国際シンポジウム特別セッションオーガナイザおよび座長，1999年6月，米国ボストン。

2). IEEE MTT Trans. Special Issue on "Medical Application and Biological Effect of RF/Microwaves" ゲストエディタ。

3). Proceeding In Electromagnetics Research Symposium, 1999年3月TPCおよび座長（台北），1999年度7月座長（ボストン），2000年度座長（ボストン），2001年度セッションオーガナイザおよび座長（大阪）。

若林敏雄

1) 1997 Thailand -Japan Joint Symposium on Antenna and Propagation(TJSAP1997)

電子情報通信学会アンテナ伝搬研究会・KMITL，1997年，組織・運営委員会特別幹事

2) JICA プロジェクト「Research Center for Communications and Information Technology (ReCCIT)」，JICA，1997年10月～2002年9月，国内支援委員会委員長

白石 正

1) The International conference on Amorphous and Liquid Semiconductors, Publication Committee, 22-26 Aug. 1983

2) The 3rd Japan-France Seminar, intelligent Materials and Structures, Advisory Board, 28-30, Aug. 2000

3) The 10th Japan-Russian Electronics conference, Chairman, Jan. 1984

4) The 10th Japan-Russian Electronics conference, Vice Chairman, Dec. 1982

松尾守之

1) "Thailand-Japan Joint Symposium on Microwaves 1999 ; TJMW ' 99", Pattaya, Thailand, September 21-22, 1999, 運営実行委員

2) " 1999 IEEE Intrnational Symposium on Intelligent Signal Processing and Communication Systems:ISPCS99 " ,Pukett, Thailand, December 21-22, 1999, 運営実行委員，および，座長

(4) タイ王国モンクット王工科大学ラカバン校（KMITL）と東海大学の学術交流

本節では，本学科が永らく携わってきた国際活動のひとつであるKMITLとの学術交流に，本学科がどのようにかかわってきたか振り返る。

§ 1 . コロンボ計画による学術交流

1965（昭和40）年に現在のモンクット王工科大学ラカバン校（King Mongkuts Institute of Technology Ladkrabang, KMITL）の前身であるノンブリ電気通信大学（Nondhaburi Institute of Technology, NIT）よりコロンボ計画にも基づいて，この大学の卒業生4名が，本学別科日本語研修課程で日本語を習得し，工学部通信工学科の3年に編入した。翌々年の1967（昭和42）年10月には，

2回生4名が同課程に入学した。この8名の1, 2回生は1968年と1970年に工学部通信工学科を卒業し、帰国するとすぐ母校のKMITLで教鞭をとっている。現在のKMITLの学長プラキット氏は、第1回生の一人であった。

この8名の学部留学を1期コロボ計画にもとづくものとすれば、修士課程留学を目的とする2期コロボ計画により本学の修士課程への留学がはじまったのは1972(昭和47)年度からである。この2期の留学生は1972年度から毎年4名ずつ1975年度まで4年間で16名である。ただし、1968年に学部を卒業した1回生4名のうち2名は、1970年に再度留学し、1972年に本学の修士課程を終了した。

1972, 73年度に留学した3, 4回生は、その年度の9月から6ヵ月間別科日本語研修課程で日本語を学習した後、翌年度はすぐに修士課程に進学せず、1年間は学部の電気通信工学科の専門科目の授業を聴講しながら日本語の学習を行なった。このように日本語の正規の授業は、6ヵ月であっても、その後1年間日本語の授業を受けながら専門科目の聴講をした。しかしこの学習方法は長過ぎるということもあって、1974, 75年度の5, 6回生からは、その年度の4月に別科日本語研修課程に入学し、1年間正規の日本語授業を受け、翌年4月に修士課程に進学している。この5, 6回生のうちの3名は、第1期生として1968年と70年にすでに本学学部を卒業しており、2度目の本学留学であるために日本語学習の必要はなく、すぐに修士課程に進学している。

このように、KMITLから1期の留学生として本学の学部を卒業した者8名、このうちの5名は、修士課程を修了している。さらに2期の留学生として、13名の者が、修士課程を修了している。専攻は理学研究科数学専攻の1名を除いて、学部・修士課程終了者20名全員が、電気工学系統である。従って、当時のKMITLの電気系教官のうち、本学卒業生が、60%を占めていた。

さらにコロボ計画にもとづいて、1972年から1977年までに、本学工学部から3名の電気系の先生がKMITLに派遣がされ、直接指導にあたってきた。寺本三雄先生は1973年から1977まで滞り、1975年1月から1977年4月までは支援プロジェクトのチーフ・アドバイザーであった。

こうした1期, 2期の数々の学術交流の推進に対して、昭和52(1977)年10月20日、松前重義総長にタイ国王陛下よりKMITLの名誉博士号が授与された。この授与式に出席されたあと、総長は同大学の関係者と今後の学術交流について協議され、本学が実施してきた協力を今後とも絶やすことなく、ますます実り多きものにするために、覚書がとりかわされた。

その覚書にも基づいて実施されてきた交流を第3期学術交流として、1期, 2期とはいちおう区切って考えるのが妥当であろう。それは1期, 2期の本学への派遣が、コロボ計画により実施されたのに対して、3期からは、わが国の文部省あるいは国際協力事業団の奨学金による2年ないし3年の長期の派遣と、本学とKMITLとの学術交流協定によるものがあるからである。この協定により、本学を卒業した卒業生たちの研究支援がつつげられた。

文部省および国際協力事業団による奨学金に基づく日本留学と、本学とKMITLとの学術交流協定による交流(第3期学術交流)が開始された。

§ 2. 東海大学とKMITLとの学術交流協定による国際活動

(1) KMITL教員の東海大学訪問

研究者交流	57名
短期研修	14名(学長, 学部長, 副学部長他が数日 1週間程度滞在)

(2) 東海大学教員の K M I T L 訪問

研究者交流 48名

(3) 留学生の受け入れ

本協定における受け入れは1993年度より毎年延べ1名の枠で規定されたが、1995年より実施。

修士課程： 1名，博士課程： 2名

(4) 研修生の受け入れ

KMITL学生を受け入れ数(約1ヶ月) 53名(1997年から実施)

(5) 博士の学位取得について(協定以外も含む)

(イ) 東海大学で学位を取得した K M I T L 教

課程博士 12名(留学による)

- | | |
|---------------------------|-------------------------------|
| 1. Wiwat Kiranond: | 7. Toempon Phetchakul: |
| 2. Kanok Jainjirapongvej: | 8. Surapan: |
| 3. Boonwat Attachoo: | 9. Sakul Hovanotayan: |
| 4. Jongkol Ngamwiwit: | 10. Attasit: |
| 5. Somkiat Supadech: | 11. Thanit Trisuwannawat: |
| 6. Kantit: | 12. Chinda Charoenphonphanich |

論文博士 4名(日本学術振興会(J S P S)による)

1. Manas Sangvorasilpa:
2. Wisut Thitirungruang:
3. Tawil Paungma:
4. Kitti Tirasesth:

(ロ) 東海大学教員指導によるKMITLでの学位取得者数

課程博士 2名(JICA, 及び東海大との協定等による指導)

1. Monai Krairiksh: Concentric Conducting Spherical Cavity-Backed Slot Array Applicator: 1994
2. Sompol Kosulvit: A Bidirectional Antenna Using A Probe Excited Ring: 2001.

§ 3 総務省(旧郵政省), 国際協力事業団(JICA)を通じた協力

(1) 第1次技術協力(昭和38年8月 ~ 昭和52年)

1960年8月24日にタイ王国政府と日本政府との間で、ノンタブリ電気通信訓練センター設立のための技術協力協定が調印され、翌年2月からセンターの落成式が行われ、電気通信技術者養成が開始された。1962年、ノンタブリ電気通信大学に昇格した。対象の分野は当初、マイクロ通信、搬送電話、電信、電話、無線、線路、TV放送、ラジオ放送であったが、後半から制御工学、電子回路が追加された。この協力協定により、タイ国の電気通信技術者の養成が行われた。尚、寺本三雄名誉教授は2000年10月タイ国王よりデレクナポン賞(功勞賞)が授与された。

(イ) 長期専門家 3名(総数47名)

(ロ) 研修員受け入れ 24名(上記1. 第1, 2期学術交流の留学生の総数)

(2) 第2次技術協力(昭和53年12月 ~ 昭和58年8月)

1978年にKMITL工学部拡張のための技術協力合意がなされ、コンピュータ、電子、電気の分野で第2次のプロジェクトが開始され、6名の長期専門家が東海大学などから。

(イ) 長期専門家 3名(総数6名)

(ロ) 研修員受け入れ 4名

(3) 第3次技術協力(昭和63年4月 ~ 平成3年3月)

1988年にKMITL学部及び大学院修士レベルにおける工学部拡充のための技術協力合意がなされ、通信、放送、データ通信、機械工学の4分野でプロジェクトが実施され、11名の長期専門家が投入された。本学からは機械工学の分野で2名が派遣され、KMITLの機械工学科のカリキュラムの整備、実験設備等教育の充実を図り、研究の向上に務めた。

(イ) 長期専門家 2名(総数11名)

(ロ) 短期専門家 41名

(ハ) 研修員受け入れ 12名

(4) 4次技術協力(平成9年~平成14年9月末終了予定)平成13年9月末現在

タイ経済社会におけるニーズを反映し、情報通信分野における研究能力の向上及び大学院教育の充実を目的とし、1997年10月より第4次プロジェクト「情報通信技術研究センター(Research Center for Communications and Information Technology: ReCCIT)が開始された。このプロジェクトはこれまでのJICAプロジェクトとは赴きを異にして大学の研究・教育を重視したものであり、大学の資質の向上を図るものである。

プロジェクトの成果として、2002年の終了までに10数名の博士の学位取得者が見込まれること、学会誌掲載論文や国際シンポジウムの論文等が飛躍的に増加したこと、大学院教育の充実、研究のレベルの向上等が上げられた。

(イ) 長期専門家 延べ 6名(総数9名)

森屋俣昌(1998 - 1999), 松尾守之(1999.3 - 2000.3), 土井 誠(1999.9 - 2000.9), 貫洞正明(2000.3 - 2001.3), 若林敏雄(2001.4 - 2001.9), 森屋俣昌(2001.9 - 2002.1)

(ロ) 短期専門家 延べ56名(総数102名)

橋本巨, 大原茂之, 平田弘志, 森屋俣昌, 熱田清明, 佐藤和紀, 若林敏雄, 服部泰久, 近藤正三, 高橋宣明, 富山薫順, 穴吹雅敏, 鈴木八十二, 松尾守之, 内田裕久, 濱本和彦, 小峰憲行(尚。大多数の先生が複数回派遣されている, 太字は通信工学科)

(ハ) 研修員受け入れ 12名

(5) その他の協力(平成8年3月~12月)

次期プロジェクト(情報通信技術研究センターの立ち上げ)の準備として、企画支援と電磁波工学の共同研究等のために個別専門家を派遣し、KMITLの研究と教育の充実協力した。

個別専門家 1名 若林敏雄(1996.3 - 1996.12)

以上が、タイ王国KMITLと通信工学科との国際協力の歩みである。

